

82

403

Ⓜ

著 洞 玄 田 早

李 鴻 章

007580-000-3

82-403

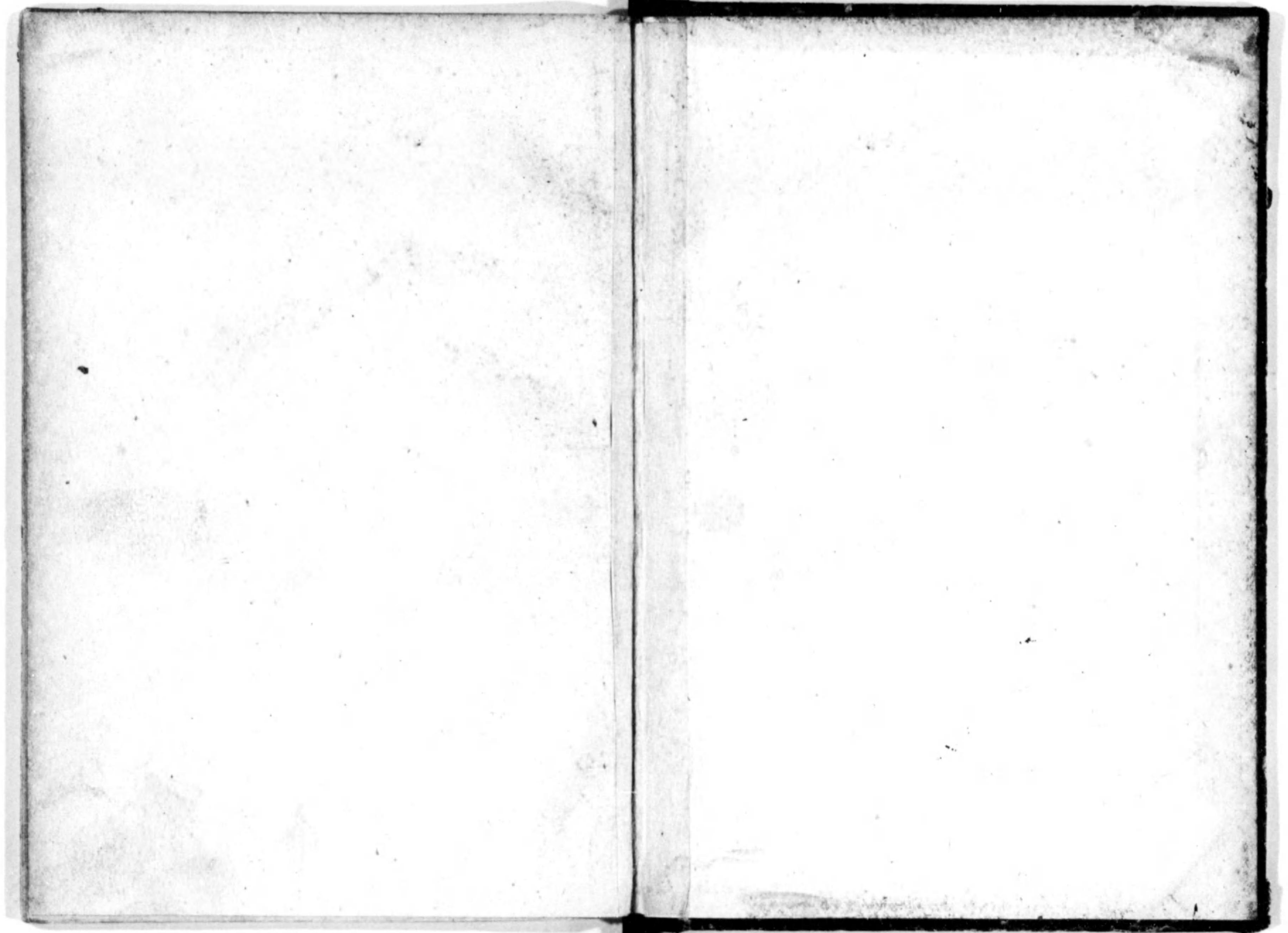
李鴻章

早田 玄洞 / 著

M35

ACL-0033



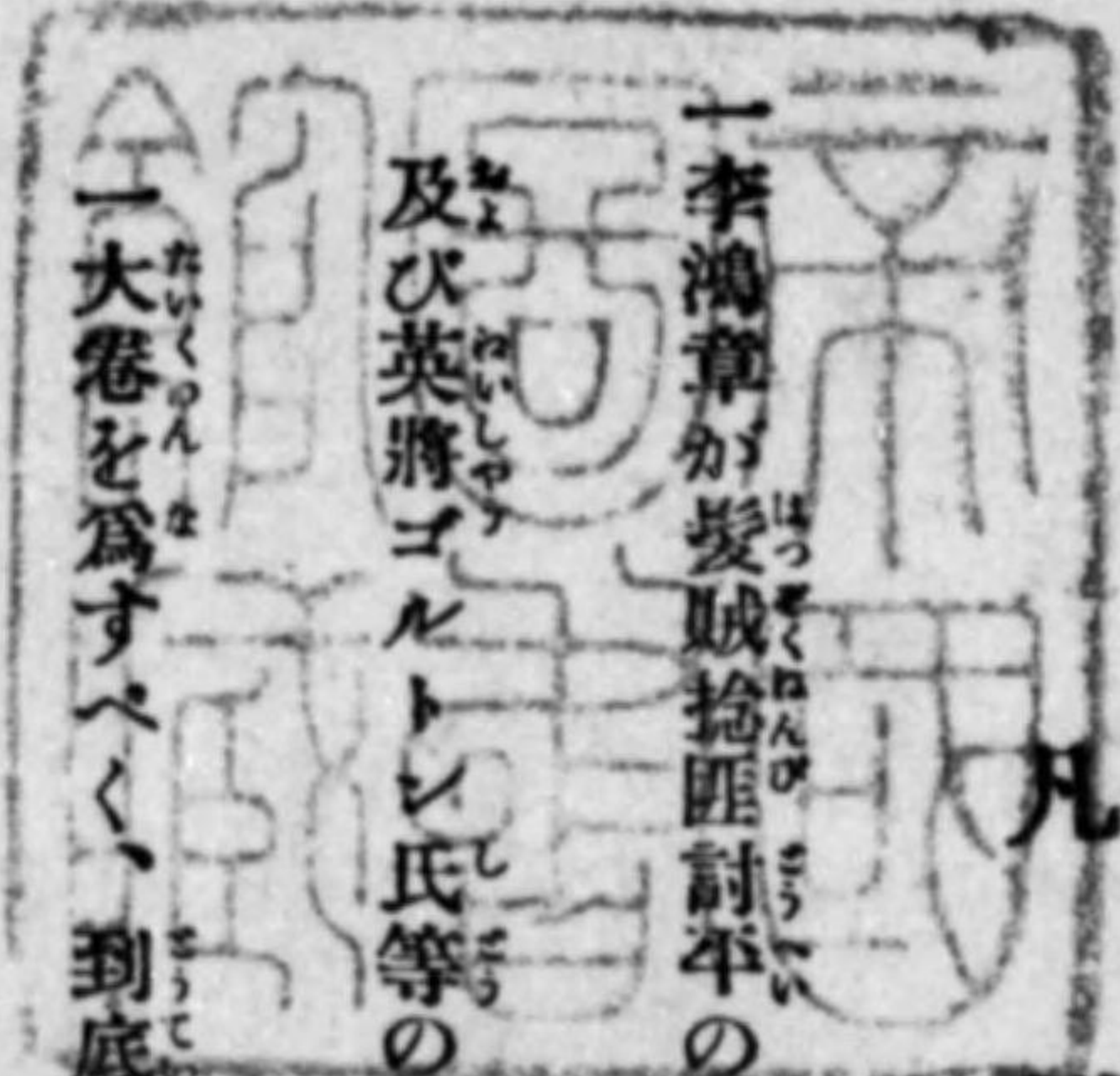


82-403



最 近 の 李 鴻 章

凡例



一李鴻章が髮賊捻匪討平の事跡は、王定安の湘軍記、曾根俊虎氏の清國近世戦亂記、

及び英將ゴルトン氏等の傳記に詳らかなり、これを詳細に叙せんとせば、褒然たる

一大卷を爲すべく、到底此の小冊子の收め得べきにあらず、讀者若し其の詳かなる

知るを要せば、宜しくこれ等の書を精讀せらるべし

一卷首に挿める肖像は李鴻章最近の寫影にかゝるものなり



目次

目次	次
第一 緒言.....	一
第二 發迹時期 (上).....	三
鄉貫父母、教育、進士、發迹の襍染、生誕時に於ける世界の潮流	
第三 發迹時期 (中).....	八
翰林院、小説的説話、蛟龍池中の物にあらず、初陣の奇功、轆轤不遇、曾文正の幕下に投ず、	
第四 發迹時期 (下).....	一五
曾國藩の推輓、淮軍建設、江蘇の軍事を委任せらる、英將戈登と結ぶ、金陵攻陥、封爵を賜ふ	
第五 全盛時期 (上).....	二〇

捻匪の蜂起、淮軍の訓練、捻匪討平の一般方略、東捻の圍地攻撃、西捻討平

第六 全盛時期 (下).....二五

騷亂善後意見、直隸總督、文武の施設、外國との交渉、日本との交渉、朝鮮の經營

第七 末路 (上).....三九

日本に對する警戒、朝鮮出兵、日清交戦、清軍連敗、媾和談判

第八 末路 (下).....四八

狼を逐はんと欲して豺を進む、兩廣總督、團匪善後、薨去、哀痛の詔、

第九 餘談.....五一

(一) 英將戈登、李の不信を怒る、

(二) 戈登、李に獨立を勸む、

(三) 曾國藩と李鴻章

(四) 曾國藩の評

(五) 李鴻章の詩

(六) 李の政治癖

(七) 李の風采

(八) 李の性急

(九) 李の細心

(十) 李の迷信

(十一) 李の敵愾心

(十二) 李の精刻

(十三) 母の喪に於ける李鴻章

- (十四) 外國人に對する李鴻章
- (十五) グランド將軍と李鴻章
- (十六) 副島伯と李鴻章
- (十七) 故陸奥伯の評
- (十八) 報國の血
- (十九) 安徽と長州
- (二十) 李、伊藤伯を擲擄す
- (二十一) 伊藤に一矢を酬ひらる
- (二十二) 紐育に於ける李鴻章
- (二十三) グランド將軍を追慕す
- (二十四) 微侯と語る
- (二十五) グランド將軍の評言

- (二十六) 李の書風
- (二十七) 李鴻章の外交遺策
- (二十八) 全上
- (二十九) 副島伯談片
- (三十) 李の性質
- (三十一) 李の匪躬
- (三十二) 李家の財産

第十 蓋棺後の評論

眞價は死後に定まる、曾國藩を紹述せるは李の李なる所以、李の親露政
策、東京諸新聞の評論

逸事 李鴻章

第一 緒言

玄洞主人編

李鴻章果して、蓋世の偉傑なりしか、之に答て然りと断定するには、多少躊躇せざる能はず、さりながら、運れを以て、尋常一様の平々凡々たる俗政治家なりと思惟するものは、全世界を擧げて只の一人もあらざるべし、ある時は獨の微侯、英の虞氏と並び稱されて、世界三傑の一人と呼ばれ、兒童走卒も其の名を聞知せざるものなかりき、又ある時は偽英雄と誦しめられ、狸爺と罵しられ、半文錢の價値だも留めざる如きありき、榮枯は天時の循環、盛衰は人世の常態なりとは云へ紛々たる毀譽、一身に翹集し、昨是今非、宛として亂麻に異ならざること、李鴻章其人の如きは蓋し罕に見

る所なりとす。聞説らく深山大澤は龍蛇を生ずと、小國の人材は、慧巧なりと雖も、其の器たるや小なり、大國の人材は之に反す、其の質或は魯なるが如くにして、其の量實に大なり、顧みるに支那は老羸垂死に近しと雖も、未だ東亞の大邦たるを失なはず、李鴻章時に金箔氣なきにあらずと雖も、五十餘年間國家樞要の地位に居り、外は折衝の任に當り、内は獻猷の務を盡す、其の器量豈に大に人に過るものなしとせんや、而して今や則ち亡も、若し夫れ人の眞價なるもの、棺を蓋ふて後に定まるとせば、李氏の世評一定するの日も亦遠きにあらざるべし。

熟々李氏の行迹を按ずるに、其の生涯を分けて三時期とするを得べし、即ち第一發迹時期、第二全盛時期、第三末路是れなり、而して此の境遇は、髮匪討平以來の清國の運命と正に相伴ふ、若し仔細に之を歴編せば、以て一部の支那近世史とするを得べく、又東洋外交史とするを得べし是れ豈に咄嗟の業ならんや、余輩が此の小冊子を編

纂せるは、固より斯る大目的を有するにあらず、期する所は、李氏果して豪傑なるか、將た聯々たる才子なるか、若くは又鬼面を假りて人を嚇すの偽英雄なるか、其の髮鬚たる面貌を傳へんと欲するに過ぎず、讀者乞ふ之を諒せられよ。

第二 發迹時期 (上)

李鴻章字は漸甫、又少筌と號す、安徽省廬州府合肥縣の人、父の名は進文、母は沈氏。

斯く叙し來れば、其の次に續ぐべき文句は、古來名ある人物の生ひ立ちを記すに當り、殆んど定例となりしが如き、幼にして穎悟、長じて云々、甚しきは乃ち母の胎内

を出るや否や、一種の奇特瑞兆を現はして、人を驚殺せりなせいふの事柄を載せざれば、甚だ語路の悪るき仕末にして、又實際李鴻章の生ひ立ちに關しては、此の種の傳説なきにしもあらずと雖も、好し簡様のことありたりとて格別其の人に難有味を添ふるにあらず、之なしとて、毫末だも威重を減ずるの次第にあらざれば、童幼時代の事は茲には一切ぬきとして、世間普通にあるべき通り、先づ呱呱の聲を揚げ、次ぎに這ひ、次ぎに立ち、次ぎに歩み、而して遂に教育の時代に入るとなさん。

安徽省は南清地方にして、古昔の荆楚に屬す、儒學頗る盛にして、所謂家々咕嗶の聲を聞かざるなきの場處たり、而して李氏は世々儒を以て業とせりと云へば、鴻章も亦幼より詩書經子の素讀句讀を受けたるなるべく、殊に清國讀書子の例として、科舉(文官登用試験)に應ずるの準備を整へんが爲め、謂ふ所の八股(科舉の)の文に腦漿を絞りたるや論なし。

されど李鴻章が後來政治家として貢獻せる智識の淵源を、此の時期の教育修練に得

たりとは謂ふべからず、何となれば元來科舉の法なるものは、支那累代の弊制たるのみならず、清朝に至るに迨び、更に煩碎なる形式を設け、滿天下の諸生をして、終生排字儷句の間に頭出頭没し、愈々實學に遠ざからしむるの方針に出でたるものにして、言はゞ一種の黔首を愚にする策たるに過ぎざれば、之に依りて治國平天下の經綸を修得せんことは、殆んど望むべからざるのことたり、聰慧なる李鴻章の如きも、進仕の途を求むるに就き、此の巢窠に陥りて、空しく年少精力の幾分を磨損するを免かれ得ざりしは、亦惜むべきのことならずや。

李鴻章は道光二十七年進士の第に中たり、所謂文官登用試験に及第せり、是の時年二十五、由來支那儒生が畢生の目的は仕官に在り、仕官を得んには既に説けるが如く、是非とも科舉の門をくぐらざるべからず、されば白髮の秀才が、腦漿を傾け盡して、試験準備に斃るゝもの敢て珍らしとするに足らず、日本の書生間に於ては、稱して慢性試験加答兒患者と爲し、之を輕蔑するの風あるも、支那には此の如き揶揄的熱

語のなきは勿論、好し身を一箇の秀才若くは舉人に終ふも、到る處、先生として頗る威張り通すを得、況んや既に進士の第に中たり、翰林院に入るに於ておや、後來の榮達、眼前鼻頭に在り、士人名譽の第一關に到達せしもの其の得意知るべきなり、而して鴻章は實に弱冠にして此の盛名を荷へり、當時士大夫の間、嘖々として其の聰明を傳へしは洵に以なしとせず。

李鴻章は尋常儒生の常套たる大歩を踏み、而かも其の年少時代の學問たる、眞個に無用の長物なりしにも拘らず、兎に角も之に依りて出身の首途に就きたるのみならず、更に此の際に於て後來發迹の襪染を造りたるは、道がに渠れの慧敏と謂はざるべからず、是れ他にあらず、鴻章が翰林院に在るの時に當り、支那近代の大偉人曾國藩に知られたるの一事是れなり、是れ恰かも我が男爵伊東巳代治が、兵庫縣の譯官たりし折に、時の縣令伊藤博文に取り入りたると同一筆法にして、内閣大學士一等肅毅伯たるの萌芽を此の時に養へりと謂ふべし、只會國藩と伊藤博文とを比較すれば、提灯

と釣鐘たるが如く、李鴻章も亦伊東巳代治輩の品彙匹儔にあらざるは勿論なり。

更に一事の讀者の頭腦に確印すべきことあり、李鴻章は道光三年癸未（我が文政六年）正月五日を以て生る、此の時世界の潮流は、如何なる傾向を示しつゝありしか、是れ實に忽諾に附すべからざるの事柄たるなり。

佛國大革命以來、引き續ける西歐大陸の動搖は、蓋世の英雄那翁一世を、絶海の孤島に葬むりしに依りて、一先づ舞臺を納め、列國各々自己の封疆を保ちて、侵掠の迹を絶ちたるの代りに、餘勇を遠征に向け、競ふて巨腕を東方に延ぶるに至れり、露人の我が蝦夷に寇し、英船の江戸近き浦賀に入り、徳川幕府を絶鷲しめたるも此の時に在り、而して支那に於ては其の事端更に大に、北疆には伊犁の境界紛議を、露國との間に醸すあり、南方には阿片事件の火の手、漸く煙を揚げんとしつゝあり、是れ皆李鴻章が娑婆世界に産聲を揚げしの時にして、東洋將に多事ならんとするの秋に際せり。

加ふるにワット氏が大發明たる蒸汽動力は、間もなく大艦巨舶に装置せられ、天涯萬里、恰かも比隣の如く、世界縮地の奇術を現成したるのみならず、蘇西地峽の堀割、其の成功を告ぐるの曉に至り、東西の距離愈々迫り、西力の東漸は、澎湃として大潮の寄せ来るに均しく、亦拒ぐべからざるの趨勢となれり。

看よ、此の潮流の如何に奔注し、如何に激騰し、岸を嚼み、崖を碎き、後來東洋有数の老外交家をして、頓足し、悲泣し、痛哭して胸を打たしめたるかを。

蘇老泉曰く、天の人生ずる豈に偶然ならむやと、李鴻章は正に十九世紀末に於ける、東洋騷擾の舞臺に盤旋すべく作られたるなり、匪賊討平の武勳の如き、渠れが抽頭の地歩を造りしに止まり、永く傳ふるに足らざるなり。

第三 發迹時期 (中)

翰林院、小説的談話、蛟龍池中の物に非らず、初陣の奇功、編綱不遇、曾文正の幕下に投ず、

李鴻章が儒生を以て身を起し、翰林院に入りしことは上述せる所の如し、清朝官制によれば、翰林院は國史、圖籍、制誥、文章の事を掌るに過ぎざるも、元來翰林の選たる、士人の科第を歴て、正路に進仕する者の匯聚する所なれば、其の資格最も清貴なりとす、編修以上は政事の得失、官吏の是非をも論奏するを得、政府に大事ありて、九卿會議を開くの時、意見封事を上ると得るの特遇を有し、一たび此の院より出身すれば、高等の顯職に補叙せらる、鴻章既に身を此の龍門に入れにき、然れども終に快々として志を得る能はざりしなり。

此の際に於て一場の小説的談話あり、鴻章北京に在りて志を得ず、鬱々として郷里に還るの途中、一旅店に投ず、夜半に至り、隣室に女の悲泣するを聞く、尋で何者か罵しり嘆き、頻りに鞭撻を加ふるもの、如し、女の叫ぶこと愈々哀しく、聲耳に徹して眠るを得ず、年少客氣の鴻章、何かは猶豫せん、直に闔を排して其の室に入れば、三人の相貌悪き老婆、一人の少女を捉えて、盛んに打擲じつゝあり、少女は鴻章を仰

き見て、手を合して救ひを乞ひぬ、鴻章其の故を訊ふに、三人の老婆は上海の人賣りにして、此の少女を拘誘し來り、洋人の妾と爲して不正の利を貪らんとするなりき、鴻章慨然として老婆の惡虐を責め、少女を自分の手に奪ひ取り、翌日從者をして其の家を送りやりぬ。

李鴻章は是れより家郷に歸り、私塾を開き、徒を集めて教授しありしが、一日人あり刺を通じて入塾を求む、これを試むるに才學文章共に絶群なり、鴻章大に喜び、擢んで、塾頭と爲す、居ること幾くもなく、其の人去るを求む、鴻章これを惜めども強いて留むべからざるを知り、路纏を給して之を遣る、越へて數月門前邊に車馬の喧しさを聞く、出で、之を見れば、思はざりき先きの塾頭某、盛裝して車騎を從がへ、自ら名のるらく、北京の大官、侍郎呂賢基なり、我が女孌に公の義氣によりて耻辱を免かるゝを得、深く厚誼を荷へり、頃日塾生となりて入り込みしは、聊か公が人と爲りを觀んが爲めなりき、我れ今曾國藩等と議して公を推舉するに決し、來りて自か

ら迎ふと、辭色共に感歎を極む、鴻章大に喜び俱に共に北上しぬ、呂が皖(地名)の團練(兵營)を督するに當り、從つて其の幕中に入り、呂死して後、巡撫濟福に隨從せり。

以上の語説は其の眞偽固より知るべからざるも、鴻章が初め呂賢基が知遇を受けたるは事實なり、而かも渠れが年少氣鋭、才華煥發して、屢々同僚を壓倒せるが爲めに、衆人の猜忌を買ひ、謗議囂々として、出身の道を防遏せられたるが如し、然れども蛟龍は終に池中の物にあらず、一たび風雲の會に遇へば、天地に上下し、日月を吞吐せざれば已まざるなり、果然渠れは福巡撫の幕下に在りて一の奇功を樹て、人の耳目を聳動せしめぬ。

是の時清廷の紀綱大に弛び、姦吏横行、良民塗炭に苦しみ、所在盜匪蜂起して、物情漸く靡がし、天厭滿清、朱明再興等の旗幟を樹て、公然地方官に反抗するものあるに至りぬ、廣東の人洪秀全、韓福偉大にして雄姿あり、豪邁豁達、天主教に歸依

して自ら天帝の次子と稱し、兵を廣西の桂平縣に擧げ、長驅して長江一帯を陷いれ、金陵を根據として、號を建て、大平天國といひ、自ら天王と呼び、財を聚め、兵を練り、南清幾んど其の握中に歸せり、是れ咸豐三年二月にして、洪秀全崛起してより二年有半に過ぎず、國內土崩瓦解の狀以て知るべきなり。

北京朝廷は震駭して、頻りに上諭を下して諸省の總督巡撫をして、反徒を勦討せしめんとせしも、所謂瀟州八旗、漢土綠營等の世襲兵は、怯懦にして物の役に立つべくもあらず、反徒の向ふ所、潰裂披靡せざるはなかりき。

李鴻章此の時巡撫福康安(福濟)の幕中に在りて廬州の軍に従ふ、康安廬州を攻め、久しく下す能はず、時に賊の大兵近地に分據して犄角の勢を爲し、互に相援ふ、康安以爲らく先づ賊の援兵を絶ち、而して後に之を攻めば、以て還うするを得べし、其の援兵を絶つには含山、巢縣の二地を取るに在りと、之を諸將に圖る、然れども含山の地は遠く且險惡なるを以て、賊の爲めに乘せられんことを恐れ、皆其の行を難むす、

李鴻章獨り奮て行かんことを請ふ、康安大に喜び千總莫青雲に歩兵を授け、佐領輯胤に吉林の馬隊を授け鴻章と共に行かしむ、李鴻章乃ち二將と俱に繞りて含山城の後に一出で、疾く攻めて之を下し、直に兵を移して巢縣を攻め亦之を克復す、時に咸豐四年十二月なり是に由りて人皆李鴻章の兵機に精しきを知り、大に其の名を稱するに至れり。

文官出身の李鴻章が、武事に身を委ぬるに至りたるは此の時を以て初めとす、思ふに鴻章當時の心事は、「中原還逐鹿、投筆事戎軒」の概ありしならむ、而かも初陣の戦争に奇功を收め、人をして驚嘆せしむ、正さに是れ蛟龍の聲を奮て、冲天の勢を現はせる者、惜むべし福濟は碌々たる小人、固より以て此の風雲兒を容るゝに足らず、再び汚瀆の中に潜むの已むなきに至たらしめたることを、只夫れ狸々は狸々を知り、好漢は好漢を知る、曠世の偉人曾國藩の如きあり、初めて我が李少荃をして、懷抱の利器を揮はしむるに足るなり。

是れより後李鴻章は、輻輳不遇に沈落すること四五年、遂に身を曾國藩の幕下に投ず、國藩固より其の器を知る、留めて文牘を理せしめ、未だ兵を領せしむるに至らず、此の間の事、王定安が湘軍記論贊頗る簡明にして之を悉せり、曰く

李公鴻章、初以優貢客京師、即師事曾公國藩、其後入翰林、出贊、賢基福濟軍事、崎嶇顛沛、諛謗頗起、福公嘗具疏薦道員、鄭魁士之阻之、既簡延建郡、遺缺、擁空名、無官守、遇亦艱矣、曾公督兩江、議興淮陽水師、請補江北司道、未行、復薦兩淮運使、疏至、文宗北巡不之省、李公亦自以為數奇、不復言祿矣、未幾穆宗即位、詢十一蘇帥、曾公復薦李公、遂以道員超擢巡撫、數年之間、南定吳會、北平捻匪、剖符封爵、位兼將相、勳業爛然矣、嗟夫士之未遇也、固有飯牛版築、三北而不差者矣、及其遭遇建明、乘時利見、罄其才智、則可以廻乾坤、挽山河、故曰張之則為龍、弛之則為蛇、自古

賢豪傑、見知於天子、建樹於時者、始未嘗不淹塞、後乃烜赫也、嗚呼如李公者、可謂無負曾公知人之明者歟、是の時李鴻章年三十八、其の生涯の半は殆んど碌々の中に畢へたり、天縱の才智、施すに由なく、脾を標て其の肉の肥ゆるを嘆せしもの其れ幾回、孟子が所謂る、天の將に大任を斯の人に下さんとするや、必ず先づ其の心志を勞せしめ、其の體軀を疲らしむるものか。

第四 發迹時期 (下)

曾國藩の推輓、淮軍の建設、江蘇の軍事を委任せらる、英將戈登と結ぶ、金陵攻陷、封爵を賜ふ、

蛟龍も雲雨を得れば、猶瀕に笑はれ、驥も伯樂に遇はざれば、永く槽檻に嘶かざる能はず、士の不遇なるもの古より何を多きや、古哲白晝提灯を携へて道を行くものあり、人間を何をか爲すと、哲人答へて曰く、以て人間を求めんとするなりと、嗚乎

天下何爲すれど人なきを患へんや、患ふる所は鑑識を具ふるものなきに在り、徳川に四天王より、漢に三傑あり、那翁の配下、名將勇士雲の如く湧けり、支那老弊せりと雖も、四百餘州の廣土と、四億の人衆とを包有す、偉人曾國藩の如き者、一たび起て事を用ゆるに當り、豈に人材の乏しきを患へんや、果然として李鴻章、左宗棠、曾國荃、胡林翼、羅澤南、江忠源の如き彬々として輩出す。

是より先き髮匪の滋蔓益々甚だしく、北京の朝廷、鼎の輕重殆んど掩ふべからずなりぬ、曾國藩父の喪を以て、湖南の湘郷に在り、詔を下して強いて之を起し、賊を討するの任を委す、國藩從來養ふ所の八旗、綠營等の兵の用ゆるに足らざるを看破し、詳に方略を劃し、郷勇を募り、明の戚繼光の兵制に倣ひ、創めて湘勇の營を作る、每營五百人、書生の樸實なるものを選びて之が長と爲し、資糧を厚くし、軍法を嚴にす、森然として威容大に振ふ、曾國荃も亦勇を長沙に募り、吉字軍を樹つ、國藩更に江淮間の人、慄慄にして勇を好み、之を訓練すれば一箇の勁旅を得べきを見、乃ち上

疏して曰く。

臣が愚見を以てするに、淮除風氣剛勁、招ぐべきの勇なきを患へず、但訓練するの人なきを患ふ、已に官文を以て都興阿等に函し、楚師千人を酌帶し、馳せて江北に往き、楚軍の營制を用ゐて、淮除の勇丁を練り、其の禁約を嚴にし、其の期限を寛にせしむ、若し一二の名將其の間に出るを得ば、則ち兩淮の勁旅、三楚の聲威に減せず

咸豐十年十月、是より先き蘇州城既に賊に陥いられ、兵難を避ぐる者、四方より上海に集まる、巡撫等潰兵を集め、壯勇を募り、防戦すと雖も終に防ぐ能はず、時に湖北の商賈顧文彬といふ者楚より歸り、曾國藩の軍、已に安慶を克復し、威名遠近に震ひ、軍事駸々として振興するの狀を告げ、援兵を乞はんことを倡へ、議して會防局を立て自から之に従事す、巡撫乃ち人を遣はし援ひを曾國藩に乞ふ、曾國藩上疏し、李鴻章を薦めて曰く、鴻章は軍機に曉く、經綸の才あり、實に封疆の重きを寄するに堪

えたり、今數千人を分ちて一軍を成し、長江の下流に赴き賊を剿し、並びに援軍に資せんと、請ふて江蘇の巡撫を署理せしめ、湘軍の良將程學啓、郭松林等を擇び、六營を領して李鴻章に分付せしむ。

李鴻章更らに曾國藩の旨を受け、李元華が領する所の皖軍を合せ、益々淮勇を募りて五營と爲す、劉銘傳、潘鼎新、張樹聲、韓正國、滕嗣幾等をして其の衆を分領せしむ、壘を高くし濠を深くし、日夕操練す、初め李鴻章の楚軍を率ひて滬上に至るや、衣幘樸陋、外人或は之を嗤笑するものあり、將辨頗る漸づ、鴻章曰く、軍は能く戦かふを貴ぶ、吾が賊を破つて之を懼れしむるを待てど、既にして淮軍精銳、湘軍と名を齊らす。

時に曾國藩の軍容、日々盛んに、漸く四方を克復す、金陵の賊、勢の日々に蹙るを憂へ、百方官軍を牽制せんと欲す、然れども長江上流の官軍は勢威甚だ振ひ其當り易すからざるを知り、東南江蘇浙江に出て、主力を此の方面に集め、以て後路を拓か

郭松林

んと計る、是に於て朝廷江浙は外人往來の嚮なるを以て、或は事を生せんことを恐れ、官軍も亦先づ主力を江蘇に注ぎ、此の賊を勦滅せんと欲す、曾國藩之を曾國荃に商る、國荃謂へらく金陵は賊の根本なり、今急に之を攻めば、彼れ必ず全力を盡して來り援けん、然らば則ち各地の賊勢自から減削すべし、此の如くにして蘇杭平ぐべし、何ぞ主力を用ふことをせん、而して金陵を攻圍するの任は、請ふ弟之に當らんと、國藩其の謀を壯なりとし、乃ち金陵攻圍の事は之を國荃に任じ、浙江の軍事は左宗棠に、

江蘇の軍事は李鴻章に屬す、是に於て東南平定の大局定まる。是の時上海に一箇の義勇團體あり、元と米人ワード之を督し、砲礮を以て前行と爲し、向ふ所敵を破らざるなし、號して常勝軍といふ、ワード戦死して後英將才登總督と爲り、兵威益々振ふ、李鴻章これと力を合せ、屢々賊兵を破り、進んで蘇州城に迫り、同治二年十月（我が文久三年）遂に蘇州を陥いる、朝廷其の功を賞して太子少保銜を加ふ、是より江蘇賊迹なし、尋て曾國藩等金陵を陥れ、道がに十五年間支那半國

に蟠踞せる、長髮賊も是に於いてか討平せられぬ、其の勲業の大なる固より曾國藩に歸すべしと雖も、李鴻章等の功、與りて力あり、朝廷功を論じて曾國藩を一等侯爵に、李鴻章、左宗棠、曾國荃を一等伯爵に封す。

當年軼軻の書生、一飛して封侯を取り、名聲藉甚、功業を麒麟閣に畫かるゝに至る、士の遇不遇に依りて、成敗を異にする此の如し。

第五 全盛時期 (上)

捻匪の蜂起、淮軍の訓練、捻匪討平の一般方略、東捻の圍地攻撃、西捻討平、

李鴻章既に曾國藩の推輓によりて、淮軍を督し、英國工兵佐官才登等の戮力を得て、反徒の咽喉たる蘇州城を克復し、威名赫々として揚子、一等肅毅伯太子の太保たるの榮爵を受け、一躍して全盛時期に達するの階段を陞りてあり、而も渠れが更に一層の盛譽を博し、湖南出身の儕輩を凌駕し、威望おさく曾國藩を壓せんとするに到りた

るは、捻匪討平の功績あるに由る。

所謂る捻匪なる者は、當今支那の各地方に出沒する各種の匪徒と畧其の性質を同にするものにして、事なければ散じて良民の間に伍し、知らぬ顔して農耕に従ひ、一旦陳の乗すべきを見れば、烏合獸聚して轉々劫掠を事とす、其の初め匪徒の蜂起したるは河南安徽に在りしが、次第に蔓延して、長髮賊と氣脈を通じ、山東に於て最も猖獗を極め、東湧西沒、此處に出で、彼處に走り、捉影捕風殆んど剿討すべからず、總督僧格林沁親王は同治四年四月に賊の術中に陥りて鄆城縣に戦死し、滿州馬隊の騎馬は盡く奪掠せらる、賊勢咄々京畿に迫らんとするの狀あり、此の時金陵既に陥り、髮匪鎮定に歸せるを以て、朝廷詔を曾國藩に下して捻匪を討伐せしめ、李鴻章を兩江總督署理と爲し兵賦を供給せしむ。

是より先き髮賊の平ぐや、曾國藩湘楚の諸軍を解き、各々其の郷に還らしめ、獨り李鴻章部下の淮軍を留め、洋式の訓練を施し、更に砲兵騎兵を創設し、以て捻匪討伐

の用に備へき、是に於て國藩は是れ等の兵勇を主力と爲し、別に各省巡撫の兵を合せ北上して匪徒の掃蕩に従事せり。

然るに捻匪は一種の流賊にして、徒らに追撃するの空しく奔命に疲るゝのみなるを以て、曾國藩は兵を各處の要地に駐め、賊の奔竄の途を絶ち、漸次に之を狹隘なる圈内に追ひ込み、一舉して之を殲滅するの一般方畧を定め、征討軍を進めたるが、翌年十月曾は久しく軍務に従ひ疲憊に堪えざるの故を以て督辦軍務の任を辭したれば、朝廷李鴻章に命じて之に代らしめ、曾は兩江總督として兵餉を掌どり、李は欽差大臣專辦剿匪事宜に任じ、兩人其の職務を轉換しぬ。

此の時各地に散在せる捻賊は、合して東捻西捻の二大部と爲り、東捻は山東河南を奔掠し、西捻は陝西地方に竄入し、凶餓頗る熾なり、李鴻章は曾國藩と軍議を定め、先づ東捻を討滅して、次に西捻に及ぶの方畧を取り、猶圍地掃蕩の大方針を持続せり、其の奏疏の要に曰く、

臣熟々利害の輕重を量るに、其の常に賊と角廻して、毒を江、皖、齊、豫、楚に流さんよりは一隅の地を棄て、誘致するに如かず、其の運河の東なる濟、泰、兗、沂、青及び薊の徐、淮、海各地を奔走して俱に其の害を被らんより、登萊二地を棄て、以て之を扼するの優れるに如かず、然れども膠萊の河防嚴ならざれば、登萊扼すべからず、今賊已に膠東に竄す、此の時を機として兩河の防守を圖るべし、但し此の事たる萬全を期して、一日を争はず、是を以て臣は必ず先づ運河膠萊兩河の堤防を固築し、防守全く成りて後、兵を出して進撃に従事せん云々

と、李は此の方略に因り、其の部將劉銘傳、潘鼎新等をして萊河の防牆を築き、賊を扼せんとせり、賊も亦頗る之を覺り、防牆の未だ成らざる地を渡り、突出して西南江蘇に竄入し、以て登萊に困阨せらるゝを免る、是に於て膠萊の河防は全く無用に歸し、李が計畫の一半は水泡に屬しぬ、朝廷詔を下して李が空しく財賦を費やせるを詰責す、李乃ち上疏して斯る詰責の來るは大臣

相和せざるの致す所なりとし、國家多難の時に方り、大臣内に和せざるは求めて自ら困蹶を招く所以なり、宜しく一致して事に當るべきを陳し、又其の反對黨の領袖等に書を致して、深く其の非を戒しめ、意氣抗慨、堂々として動かすべからざるの概あり、朝廷も亦李の陳意を納れて之を追責せず、反對黨も随つて口を噤む、李乃ち專意討伐に従事するを得たり。

膠萊の河防は既に骨折損に歸したるも、李は固く運河防守の議を取りて動かす、江蘇東部の運河より、山東の六塘河に連り、全線三百五十清里餘の間に防壁を築き、捻賊を此の中に圍して、一步も他方に動かす能はざらしめぬ、賊狂闘して勝ず、遂に殲滅せらるゝに至る。

東捻は此の如くにして平ぎしも、西捻未だ剿滅に就ず、陝甘總督左宗棠に驅逐せられて北の方黄河を渡り、同治七年の初め、直隸省の南部に侵入し、順德、鉅鹿の二城を陥れ、北京朝廷を震駭せしめぬ、朝廷又命を李鴻章に下して、天津河間兩府の間

を防禦せしむ。李乃ち東捻剿絶の筆法に依り、要衝の地點を防守して、漸次に狹隘に追ひ詰むるの策を建て、再び河防を主張せり、其の論に曰く、

嚮に東捻の黄河の南に在るとき官軍は黄河の北部と、運河の西部を防守し、賊を驅りて海東に圍し終に平賊の功を奏したり、今西捻は黄河の北に在り、故に張秋を嚴守せざれば合圍する能はず云々。

と、恰かも捻賊は、李が望みし如く運河の東に竄入したるを以て、李の圍地策は大に機宜に適し、袋の鼠を捕ふるが如く、全く討滅の功を奏したり。

捻匪の討平は前後五年を費やし、之に髮賊の動亂十五年を加ふれば、戦亂二十年の久しさに亘り、滿清中興の業初めて定まる、而して其の勳功曾李實に之が首たりしなり。

第六 全盛時期 (下)

國體善後意見、直隸總督、文武の施設、外國との交通、日本との交通、朝鮮の經營

擒賊討平中に於て、李鴻章は兩廣總督に任せられぬ、然れども渠れは地方政務にのみ局促たるものにあらず、一國經綸の策を建て、大なる助言とを北京政府に與へたり。

李が經綸の第一着手は軍制の改革に在りしもの、如し、既に述べたる如く、清國の常備軍、帝室の親兵たる滿州八旗の外、綠營定制の兵六十餘萬あり、然れども皆終身有祿の故を以て、承平日久しく、盡く怯懦に陥り、髮匪の亂に當り、全く其の腐爛の實を表白し、毫も扞禦の任に堪へざるは、李が既に實驗せる所なるも、因襲年を経たる兵制を一舉に更革するは、勢能はざる所なるが故に、兵勇並び存して、一層訓練を嚴にするを以て、時務を得たりとするに在りき、賊亂平定の後、各省大臣皆善後の事に就き意見を奏す、李鴻章乃ち左の如き奏議を呈したり、曰く、

軍興るより殆んど二十年初め兵を調發すること多くして、而して賊勢愈々熾なり、其後調兵を停め、勇丁を募招す、是に至りて舊規一變す、粵捻二賊相次て平ぎ、勇丁の功績著しく顯はる、抑々綠營には驕傲の積習甚だしく、兵士懦弱にして、將校一致を欠く、勇丁は則ち然らず、索と賦畝より起るを以て、樸實にして艱苦に耐ふ、統領と云い、營將と云ふも、皆選舉を行ふて就職す、故に將卒一氣危きに臨みて命を効す、惟ふに有事の日、勇丁を募集して急を濟し、無事の日、兵を訓練して、盜賊を緝捕し、以て民の安撫に任ず、故に皆偏廢すべからざるものなり、又弱兵を教練して強兵と爲さんには、良法を立つると、人材を擇用するの二端に在り、故に此の二端は、大に改正を要するものあり、今や干戈大に戢り、勇丁は漸次裁撤を行ふべく、各省の綠營も亦た舊規に復すべし、然れども定時必ず整頓するを要す、又畿甸の守備は忽かせにすべからず、故に専ら本省の兵勇を用ひて其の任に當めしめば、自から人情地理に諳熟するを以て、防守進剿兩つな

がら宜しきを得べし、惟り將校は最も其の人を擇ぶに注意せざるべからず云々。
 李は後來常に此の目的を持して、自己の管下に施設し、二十餘年間淮軍は李鴻章の親
 營として、勁旅の名を博したるが、甲午の役平壤の一戦に、日本軍隊の壓殺する所と
 なり、遂に雲散霧消するに至りぬ。

李鴻章又曾國藩と善後の大局を商議し、會奏して曰く、
 粵捻二賊の中原及び東南各省を擾亂すること二十年に幾し、其間經費無量、人力
 財力を盡し、艱難經營し、辛うじて功を奏するを得たり、臣等始めより其の局に
 當り、能く當時の状況を知ら、實に國家の疲弊を極む、之を挽回するの策は甚だ
 易からざるものあり、今や用兵の事始めて止み、降賊散勇は就くべきの業なく、
 正に歸するの道なく、是の故に教匪遊手の徒、到る處に交結す、惟に軍威を憚り
 て敢て發せざるのみ、亂機の伏する所と、往々隱微なる所に在り、故に今の計
 は急に兵勇を裁撤せず、稍々精兵を留めて、非望を未然に鎮壓するに在り、若し

一警報あるも、召集發遣を易からしむべし、然らざれば一朝事起るの日、土崩瓦
 解、遂に收拾すべからざるに至らん、徒らに目下の小費を斬み、將來の鉅難を怠
 るは臣等の取らざる所なり。

然れども大愆既に斃れ、國內暫く肅清せるを以て、勇兵は漸次に淘汰して裁撤し、各
 省に留營服役するもの、十數萬に止めたるが如し。

又文教に關しては、曾國藩は主として海外留學生派遣の議を建てたり。

國藩竊に按ずるに、西人の學は實濟を求め、士たり、工たり、兵たるに論なく、
 皆讀書せざるはなし、且各其の心思功力を出し、月に異にして歳に同じからざる
 を期す、中國其の長を取らんと欲せば、彼の國に留まり學びて、本源を洞徹し、
 曲折を明白にするに在り、宜しく沿海各省の聰穎なる幼童を訪選し、年毎に三十
 名つゝ、四年百二十名を計り、在外十五年の後、本國に召還すべし、彼等年方さ
 に三十上下、氣壯むなり、時に於て報効必ず益あらん、是れ臣が海外に遊び、其

の文物を目撃したる臣某々と業已に商確したる所なり。

尊大倨傲、中華を以て自ら居るの支那に於て、其の常に夷狄視する所の西歐諸國に向つて、留學生を派遣せんとするが如きは、實に破天荒の一喝にして、朝廷の頑陋輩が愕然として澄目せるや知るべし、然れども曾國藩の建議は李鴻章によりて仕遂られ、目今支那新進の政治家と稱するものは、多く此の海外留學生より出たるのみならず、各種の技術者を養成し得たるは、實に曾が卓見に出づ。

李鴻章は又捻匪討伐の際、文教を受けたるもの、大義名分に明かにして、喜んで官軍の爲めに力を致したるの實驗により、教化の忽せにすべからざるを奏し、山東省に於ける孔子の廟を修理し、大祭を執行して、民に歸向する所を知らしめぬ。

李又民心安慰の旨を乞ひぬ、曰く、

目下大亂の後を承け、人心未だ定まらず、此の時に際し宜しく明諭を下し、凡そ捻賊の未だ平定せざる以前に在りて、一旦匪擧を爲し、後に歸順せしものは寛典

に従ひ、放還安撫して以て民心を安んせよ、

と、朝廷皆これを嘉納しぬ。

捻匪討平の後二年、即ち同治九年（我が明治三年）天津に於て、露佛の天主教徒虐殺の件興る、時の直隸總督曾國藩責を引いて退くに當り、李鴻章代つて之に任じ、初めて外交場裡に向つて敏腕を試みるに至る。

李鴻章は曩きに久しく上海に在り、多く外人に接して其の文物を研究する所あり、直隸總督となるに及び、銳意西歐の長を取り、武備學堂を修め、外國教師を雇ひて數學、製圖、理化、地理、歴史、築城、戰術、砲術、英獨語學の諸學科を教授し、又陸軍大學校を設け高等の戰術を習得せしめたりき、李鴻章は是等訓練の兵士を股肱として、光緒十七年熱河に蜂起せるの匪徒討平の任を受け、部將葉士超、聶士成、傅廷臣等を派遣し、翌年之を剿滅するの功を奏しぬ。

海軍も亦李が極力經營せる所にして、水師學堂を設けて士官を養成するの傍、所

謂る北洋水師を創建し、定遠、鎮遠の二大甲鐵艦を初め、經遠、來遠、致遠、靖遠、濟遠、平遠、超勇、揚威、康濟、威遠、敏捷、鎮海、鎮東、鎮北、鎮西、鎮中、鎮邊、鎮安、操江等二十餘隻の軍艦（噸數約五萬、兵員六千人）を備へ、當時東洋無比の名を輝かし、提督丁汝昌をして我が日本に向つて示威的航海を爲さしむるに至りぬ。

李は又大沽、威海衛、旅順、大連灣に砲臺を築造し、盛に直隸灣の防備を嚴修したりき、光緒十七年、我が明治二十四年（恭親王を請ふて、北洋海防の大檢閲を行ひ、尙は前程の施設に就て奏上する所あり、蓋し李は之を以て先づ日本の覬覦を絶ち、徐に諸外國に對して強硬の談判を開き、以て國威を恢復せんと圖りしが如し、當時皇帝は李の施設を嘉し、左の訓諭を下されたり。

李鴻章及び張曜（山東巡撫）より北洋海軍を校閲し、各海口の砲臺船渠等の工程を勘査したる旨奏上せり、該大臣等旅順口以下各軍港を周歴し、南北洋艦隊を調集し、連台大演習を行ひ、水陸各營の軍備を校閲し、其の技藝の純熟、行軍の齊整

を見る、又各所砲臺船渠等の工は俱に堅固と稱す、李鴻章盡心籌量、頻年布置する所、漸く周密に臻れり、洵に嘉尙するに堪えたり、茲に部に附し優叙せしむ、張曜は合同籌辦の勞あり、亦部に附し議叙せしむ、其の他管屬將領の士を練り工を督する等、功勞ある者は、各々保薦獎勵し、以て鼓勵を示すべし、海軍は國家に緊要の關係なれば精益求精を求めざるべからず、仍は李鴻章張曜に命じ、切實に購求せしめ、提鎮以下を督飭し、經理の久しきを歷て懈らず、日に進功あるを期すべきなり、其の附奏に係る烟臺、膠州諸處に砲臺を新築するの議は之を准可す、該衙門此の旨を奉戴すべし、

と、是れ李鴻章が最得意の時代にして、威望隆々、一身にして海陸軍、外務の局を兼ね、傲然として東亞を睥睨したり、豈に僅に二年を隔て、北洋水師は全く殲滅せられ、遼東、山東の野、日本軍隊の馬蹄に蹂躪せらるゝを豫想せんや、又况んや今日旅順、大連は露國に歸し、威海衛英の占據となり、膠州獨に横奪せられ、大沽の砲臺列國の

占領に入り、緘甸守らず、國君遠く虜辱するの慘狀を夢想せんや。大清の盛衰は國の
 李は又電信建築、鐵道敷設の議を建て、學校を設けて技術者を養成し、又醫學を興
 勵して洋方の長を採れり、其の他汽船會社の創設、炭礦の採掘、銀行創立等、李が手
 腕に依りて近世文物の實施せられたるもの擧げて數ふべからず。
 李は同治九年より光緒二十一年に至るまで、引き続き二十五年間直隸總督の職に留
 り、其の北洋通商大臣を兼ねたるのみならず、天津は實に諸外國使臣が北京に至るの
 樞路にあるを以て、李は絶えず外人と接して多く研磨砥礪する所あり、されば清國に
 於ける世界的智識を有する政治家は李を置て他に求むるを得ず、是を以て清國の外
 交は、常に李に依りて折衝せられ、談判應接悉く李を俟て然る後に行なはるるを例と
 す、例へば光緒二年英國通譯官マーガリーの被害、及び雲南に於ける英吉利宣教師の
 迫害等に依り、英國の談判を受けて芝罘協商を締結し、同十年に於ては安南事件に關
 し佛國の艦長フルニエールと協商を遂げ、清國が安南及び東京に對する宗主權を擁

ち、而して一方には長髮賊の遺將劉永福を使囑して黒旗兵を率ゐて安南に入り、飽ま
 で佛兵に抵抗せしめ、其の間に於て、天津條約及び天津協商を締結し、甚だしく國權を
 傷けずして兩國の争ひを收め、佛の提督クイルペーをして憤死を遂げしめたるが如き、
 李が權術の優れたるを見るべし、同十三年には露國と談判して巨文島の兵を撤退して、
 再び朝鮮の地を占領することなきを誓はしめたる如き、一として李の手に依りて成さ
 れざるはなかりき。

我が日本との關係に至りては、同治十二年(我が明治六年)臺灣事件に當り、我が辨
 理大臣大久保利通と折衝したるも渠れならず、當時李は例の猾智を弄し、依違遷延、
 容易に落着を告ぐるを欲せず、我が甲東の一喝に遇ひ、方さに纔に償金五十萬兩を出
 だすに至りたるも、琉球藩屬の點に就ては、全く結了を告げたりと云はんよりも、寧
 る李鴻章をして不平の中に遷延せしめたりと云ふを適當なりとすべし、其の後光緒六
 年(明治十四年)米國前大統領グラントの來遊に際し、之に仲裁を依頼して宮古諸島を

清國に與へ以て多年の確執を解かんとせり、談判既に整ひて未だ實行するに及ばず、會々伊犁事件に就き露國との交渉既に落着せるが故に、清國は急に鼻息を荒くし、遂に反覆して約を踐す。

光緒十一年(明治十九年)朝鮮京城の變、李鴻章は疾電耳と掩ふに違あらざる底の手腕を以て、朝鮮在駐の馬建忠をして大院君を拉して天津に至らしめ、兵を派して勢力を朝鮮に植え、盛んに内政に干與し、殆んど屬邦たるの實を擧げんとせり。

是に於て我が政府は翌年三月伊藤博文を全權大臣として、所謂天津條約を締結し、日清兩國共に四箇月間に在朝鮮の兵を引き揚げ、爾後出兵を要するときは互に通知することの條約を定め、兩國の衝突を和解したるが、我れの讓る所頗る多かりしを以て、李鴻章は依然として朝鮮の經營を持續したり、渠れは兵を商に扮して潛に朝鮮に入らしめ、又門下の秀英袁世凱を簡拔して京城に駐劄せしめ飽まで初一念を貫かんと期せり。

渠れが袁世凱を其の邸に招ぎ、其の歸任を送りたるの辭を讀まば、其の意氣の壯なりしや見るべし、曰く、中華今日の形勢は、一髮千鈞、人心は腐敗し、法令は紊亂す、現在目睹に横はりつゝある外國交渉のこと、一も至當の措置を爲す能はず、轉た難局を後世に貽さんどす、是れ予の最も慚恨に堪へざる所なり、無事は國の鳩毒なり、外患は國の良藥なり、然るに我が中華は外患踵ぎ至り、人心大に振起すべきに、却つて懦弱に流るゝの傾向あるは如何、願ふに必らず精神に缺る所ありて然るものならん、蓋し内を整ふるは易く、外を修むるは難し、外交官は一國の牆壁にして、國民は

一國の貨物なり、故に牆壁固からざれば、巨萬の財寶も之を藏蓄し易からず、我が袁君は所謂金城鐵壁の使臣なり、君再たび任に繼林に赴かば、須らく予が微意を體し、一步も他に讓る所なく、以て中華の宿望と、余が目的とを達せしむべし、内部の改良は重しと雖も、余が獨肩に之を擔はん、君以て内顧の憂とする勿

是れど後來、翻天覆地の日清戦役を演出すべき許多禍機を蔵するの伏線なりと知らる。李鴻章の外交主義は、柔克く剛を制すと云ふに在る由なるも、獨り日本に對しては、初めより輕侮して粗硬の態度に出でたるが如し、其の一敗地に塗れて、復起つ能はざるは、敵を知り、己れを知るの明かならざるに坐す。

之を要するに日清戦役前に於る李の外交は、頗る苦心慘憺たるものにして、時恰かも國歩艱難の秋に當り、外には列強の壓迫あり、内には頑冥不靈の徒、跋扈跳梁を極め、益々外交の困難を甚だしからしめたるが爲めに、李が遂行せる協商條約は、清國に取りて不利の條項少からざりしと雖も、これを以て李の無能を責むるは酷なりと謂ふべし、寧ろ斯る國家多難の時に際會し、多少の不利を犠牲としても、能く清國全土の平和を維持し、宗社の覆滅を救ひたるの功は没却すべからず、而も李は之を東隅に失して、之を桑榆に收めんとするの政策を持し、日本に迫りて朝鮮を手裡に握らんとす。

第七 末路(上)

するの大希望大計畫を實施しつゝありしおや。

日本に對する警戒、朝鮮出兵、日清交戦、清軍連敗、講和談判、清國の金の

日清の戦役は、多幸なる龍運兒を、凄慘の末路に蹴落したる關鍵なるのみならず、さらぬだに逆運に瀕せる清國を、愈々逆運の渦中に投入したる一轉機なりとす。

李鴻章が日本に對する輕侮は吾人想像の外に在りき、前米國駐清公使ジョン・ラッセル、ヤング氏は其の消息を語つて曰く、日本が西洋の智識を容るに汲々たること、

日本が海陸軍費に苦心すること、日本が西洋的教育を實施する等の事實は、彼れの最も猜忌する所なり、彼れの胸底必ず云へるならん、何故に日本人は歐羅巴人たらんと欲するか、何故に日本人は彼等の祖先の如くなるを愧るか、何故に日本人は彼等の特色、文學、技術、信仰、歴史及び傳説を保存せんと欲せざるか、余若し假りに傳

蘭西の衣を着し、佛蘭西の食を喰ひ、佛蘭西の言語を語ると雖も、若干の價値を増すかど、彼れは日本が西洋の風習に倣へるを以て、日本人心の薄志弱行の然らしむる所なりと思惟せり、之に反して彼れは頑固なる保守的支那人なり、其の衣服より一個の釦すら取除かず、其の豚尾より一毛の髪すら抜くことなし、數百年來斯くありしな眞、斯くなすは祖先の指示する所なり、故に余は斯くならざるべからずと思へるもの、如し、李は日本の文明に赴きたる消息を右の如くに認めたるを以て、日本をば實に低きものと思へり、唯だ尤も苦心せしは即ち日本の陸海軍にして、其の終極の目的は何れにあるやは彼れが夙に推知する所なり、彼れは云はんとす、日本の戦ひ得べき國は支那の外なきなり、而して何故に支那と戦はんとするか、支那は日本に向つて何の企つる所なし、何の用ありてか我國の如き世界最大の帝國が、日本の如き最小國を得んことを望まんや、余が有する國を支配するさへ非常の困難を感ずるに、外國を侵略し其の苦みを増すの愚をなさんや、されば日本の陸海軍は何の用をなさんと欲するか、

他なし一あり、即ち支那を侵掠せんとの目的是れなり、此の時には即ち支那は忽ち日本を地球の表面より一掃せしむべしと云々、是れ正に李が胸中を揣摩して一半の眞を得たるものなりき。

光緒十九年朝鮮に東學黨の亂起るや、年少氣銳の袁世凱は時乘すべしと爲し、若し中國にして天兵を出さずんば日本必らず其の舉に出でん、時なる哉、時なる哉、朝鮮をして中國の藩屏たるを固定せしむるの好機會を逸すべからずと、頻りに李鴻章を動かす所あり、李も亦在日本公使汪鳳藻に令して、竊に日本の形勢を探知せしめたるに、汪は日本政府は今方さに議會と衝突し、内自から固うする能はざるの狀勢なれば、到底進んで中國と雄を海外に競ふの餘裕なしと報じぬ、追が老猾の李も此の中外の情報に接し、所謂る中國の宿望を遂げ、自己の目的を成就するの機會至れりと狂喜し、意驕り眉揚りて、先日本を嚇するに聲を以てし、彼れ尙ほ強硬にして屈せざれば、之に繼ぐに形を以てせば、事必らず濟すを得んと、乃ち六月を以て左の訓命を汪公使の許

に送る、嗚呼是れ殆ん天が李が鑑を奪ふなり。光緒十一年中日の議定せる專條を查するに、内に云ふ、將來朝鮮若し變亂の事件ありて、中國派兵を要するときは、應に先づ行文知照すべし、事定まれば仍て即ち撤回し再び留防せず等の語あり、本大臣今朝鮮政府の文開に接す、全羅道の民凶悍に習ひ、東學教匪に附申し、衆を聚めて縣邑を攻陥し、又北に竄じて全州を陥る、前に練軍を遣はし、往て剿し利を失へり、倘し滋蔓日久しければ、憂を上國に貽す者尤も多し、查するに壬午甲申弊邦兩次の内亂は、咸く中朝兵士の代りて戡定を爲すに頼れり、茲に前案に援据し數隊を酌遣し、速かに來り代勦せられんことを懇請す、韓匪の挫殄するを俟て即ち撤回を請ひ、敢て留防を續請じ天兵の久しく外に勞するを致さず等の語あり、本大臣其の情詞の迫切なるを覽て兵を派して援助す、乃ち我朝の屬邦を保護する舊例なり、是を用て奏して諭旨を奉じ、直隸提督葉に派令し、勁旅を選帶し星速馳せて、朝鮮全羅忠清一帶に往ら

機を相て堵勦し期を尅して撲滅せしめ、務めて屬境をして又安ならしめ、各國の韓境に在て通商する者をして皆各々生業に安んずることを得せしむ、一に事竣るを俟ち仍て即ち撤回し再び留防せず、合さに速かに約に照らして行文知照して查照せられんことを請はるべし。李は之を以て妄意に日本政府は最後の決心に出る能はざるべしと臆斷したるなり、何ぞ圖らん、日本政府は在北京小村代理公使をして、朝鮮現に變亂あり、事體重大なれば若干の軍隊を派出すべく、即ち天津條約に従ひ行文知照すとの鸚鵡返しを照會を送り來らんとは、且清國公文の屬邦を保護す云々に對しては、日本未だ曾て朝鮮を以て清國の屬邦と認めたることなしと抗言し、混成旅團の日本軍は既に京城に銃劍を磨きつゝあり。李は此に至つて多少案外の氣味なきにしもあらざりしも、騎虎の勢ひ既に成り、今更止に止まれされば、益々出師準備を整へ、太浩より送兵に取り掛りつゝ、一面には

に送る、嗚呼是れ殆ん天が李が鑑を奪ふなり。光緒十一年中日の議定せる專條を查するに、内に云ふ、將來朝鮮若し變亂の事ありて、中國派兵を要するときは、應に先づ行文知照すべし、事定まれば仍て即ち撤回し再び留防せず等の語あり、本大臣今朝鮮政府の文開に接す、全羅道の民凶悍に習ひ、東學教匪に附申し、衆を聚めて縣邑を攻陥し、又北に竄じて全州を陥る、前に練軍を遣はし、往て剿し利を失へり、倘し滋蔓日久しければ、憂を上國に貽す者尤も多し、查するに壬午甲申弊邦兩次の内亂は、咸く中朝兵士の代りて戡定を爲すに頼れり、茲に前案に援据し數隊を酌遣し、速かに來り代勦せられんことを懇請す、韓匪の挫殄するを俟て即ち撤回を請ひ、敢て留防を續請じ天兵の久しく外に勞するを致さず等の語あり、本大臣其の情詞の迫切なるを覽て兵を派して援助す、乃ち我朝の屬邦を保護する舊例なり、是を用て奏して諭旨を奉じ、直隸提督葉に派令し、勁旅を選帶し星速馳せて、朝鮮全羅忠清一帶に往き、

機を相て堵勦し期を尅して撲滅せしめ、務めて屬境をして又安ならしめ、各國の韓境に在て通商する者をして皆各々生業に安んずることを得せしむ、一に事竣るを俟ち仍て即ち撤回し再び留防せず、合さに速かに約に照らして行文知照して查照せられんことを請はるべし。李は之を以て妄意に日本政府は最後の決心に出る能はざるべしと臆斷したるなり、何を圖らん、日本政府は在北京小村代理公使をして、朝鮮現に變亂あり、事體重大なれば若干の軍隊を派出すべく、即ち天津條約に従ひ行文知照すとの鸚鵡返しを照會を送り來らんとは、且清國公文の屬邦を保護す云々に對しては、日本未だ曾て朝鮮を以て清國の屬邦と認めたることなしと抗言し、混成旅團の日本軍は既に京城に銃劔を磨きつゝあり。李は此に至つて多少案外の氣味なきにしもあらざりしも、驍虎の勢ひ既に成り、今更止に止まれざれば、益々出師準備を整へ、太沽より送兵に取り掛りつゝ、一面には

英露兩國の公使に依頼し、日本の撤兵を勸告せしめたるが、日本政府は堅く強硬の態度を取りて一步も退かず、却つて朝鮮の内亂は日清兩國の軍隊共同戮力して、速かに之を鎮壓すべし、(一)右内亂平定の上は同國の内政を改革する爲め、日清兩國より常設委員若干名を派出し、其の財政を調査すると同時に、中央政府及び地方官吏を沙汰し、別に必要なる警備兵を設置して、國內の安寧を保持せしむべし、(二)且財政已に整頓したる上は出來得る丈の公債を募集して、國家の公益を起すべきの目的に使用せしむ(三)等の提案を以て照し來る、李は汪に電報して直ちに之を拒絶せしむ、曰く韓賊已に平定せり、我が軍必ずしも進剿せず、倭軍は更に會剿するの理なし、乙酉の歲伊藤が我れと約を訂す、事定まれば撤回せんと、又倭韓條約は韓の自主を認むるのみ、尤も内政に干預するの權なし、均しく約外に於て別に辦法を商議し難し、請ふ直截に回復せよ。

と、烽火既に揚る、硝煙彈雨の修羅場を現する世に遠きにあらんや。

果然豊島沖の砲撃に引き續き、兩國皇帝は開戦詔勅を發せられ、清國陸軍の精銳は牙山平壤の二役に盡き、日本軍は長驅して遼東山東の堅砦を陥れ、指顧の間北京を席捲せんとするの概あり、海戦に至つては清國の損害更に甚だしく、李鴻章が積年心血を凝ぎて建設したる、北洋水師の全部、茲に覆滅して亦其の隻影を止むるなきに至りぬ、清國皇帝は赫怒して李鴻章を詰責し、左の詔勅を下すに至りぬ(光緒二十

年七月)

倭人朝鮮に對して信義を失し兵力を以て其の國を占領したれば、朕は該屬國の爲めに同情を表して、兵を擧げて以て共同の敵を擊退せんと期せり、此の時に際して北洋大臣李鴻章は兵馬の權を管理するが故に出師準備の責任、全く其の一身に存せり、然るに優柔不斷、徒らに時日を費して、朕が附托の任に背けり、故に朕勅して三眼孔雀章(帽子の飾にして異常の功なるものに賜ふ)と黃馬褂を褫奪せしむ、是れ實に寬典を以て輕科に處するものなり、爾今以後宜しく國事に軼奪し

て、事宜を失はざらんことを勉め、又宜しく諸省の兵を徵發し、其の向ふ所を部署して以て敵軍の殲滅を計るべし、斯の如くにして始めて其の罪を免るゝことを得べきなり、

と、然れども敗勢滔々、李が老腕を以てするも到底これを喰ひ止むるに由なし、是に於て諸外國使臣に泣訴し、其の戦局を收めんとせしも、當時清國の媾和條件なるものは、朝鮮獨立の公認、及び軍費償還の二に限れるを以て、列國いづれも日本の承諾を得べからざるを知り、一も應ずるものなかりき。

李は止むを得ずして上海總稅務司オットリングをして公書を齎して神戸に往き、親しく伊藤博文に面して其の意向を探らしむ、伊藤拒絕して面せず、オットリング空しく海口より追ひ還さる、李鴻章大に狼狽し、更に米國公使に懇願して紹介の勞を託し、内閣大臣張蔭桓を全權大臣に薦め、廣島に赴き和を講せしめたるも、張の全權に缺る所あり、又一語を開くを得ずして歸る。

此の時に當り清廷の恐慌愈々甚だしく、恭親王、王文韶等は左の如き奏疏を上り、和議の速かならんことを切議したり、

誠に恐る倭人河凍一たび開くを伺かひ、兵を分ち畿輔を衝突せば、則ち憂ふべきもの大なり、臣等伏して思ふに倭奴勝に乗じて驕恣なり、其の奢望臆計すべからず、現在勉めて和局に就くに、最も注意する所のものは、唯讓地一節に在り、若し駁斥允さずんば則ち都城の危き即ち指顧に在り、今日の情勢を以て論ずれば、宗社を重しとなし、邊徼を輕しとなす、利害相懸たる數計を煩はずなし

と、かくて清國は愈々李鴻章を頭等全權大臣に任じ、一切の全權を附與し、日本と和を講せしむるに至りぬ。

馬關談判の情況は今猶ほ吾人の記憶に新なる所にして、茲に架説するの要なし、唯だ其の結果は支那は遼東臺灣を割き、軍費二億兩を償ひ、長江沿岸の各港を開きて通商貿易場と爲すこと、盡く日本提案の如く、威海衛駐軍費のみ二百萬兩の提案を五

十萬に減損し得しに止まる、蓋し戰敗國の全權としては、腕を揮ふの餘地なきに由りしなり。

實に甲午日清役の戰敗は、李が遠交近交策の大破綻にして、之に由りて清國の情勢盡く世界に曝露せられ、愈々其の黔の驢たるの本性を明かし、爾後悔りを受くる日々月々に甚だし、是れ李が自國に對する無前の失計たるのみならず、又自己の價値を損じたるや莫大なりとす。

第八 未路

狼を逐はんを欲して豺を進む、兩廣總督、團匪善後、喪去、哀憐の實

馬關條約の纒に成るや、青天の霹靂、俄然として三國干涉の事あり、日本は辱を忍んで遼東の無條件還附を諾したるも、而も清國は是れに由りても一も得る所なかりき、乃ち日本の占領を免かれたる代りに、露國の事實的奪略を免れ得ざりしなり、而して

威海衛は英に歸し、膠州灣は獨に歸したり、之を東隣に取つて、以て西隣に與ふ、馬鹿を見るものは誰ぞ、或は曰く遼東還附を直接に清國政府より哀請せずして、全く之を第三者の勢力に一任したるは李の獻策に因ると、李の外交手腕凄しと謂ふを得べしと雖も、狼を逐はんを欲して豺を進むるに類せざるなきを得んや。

是より後、李鴻章は一意露國に依頼し、自國の保全を謀らんとするの政策を取り、露帝の戴冠式には態々老身を提さげて参列し、大に歡心を結ぶ所ありしと傳ふ、其の結果として英國の惡感情を買ひ、一たび兩廣總督に貶されたるも、昨年北清に拳匪の亂起るや、人をして李鴻章若し在らばの嘆を發せしめたりき、李も亦國難を傍觀するに忍びず、廣東を發して上海に至り、暫く形勢を觀望せしが、清廷の倚信、此の老漢を除きて他に求むる能はず、終に慶親王と共に善後協商の大任を託せらるゝに至りぬ。

爾來李は北京に入り、蹇々匪躬、漸く協商を畢へ、清帝の回鑾近きに迫りしが、

天餘命を假さず、本月七日溘焉として簀を易ふ、享年七十有九、清帝哀痛、詔を下して曰く、

朕欽んで懿旨を奉ず、大學士一等肅毅伯直隸總督李鴻章は器識淵深にして方猷宏遠なり翰林より淮軍を倡率し髮捻諸匪を戡平し厥の功甚だ偉なり朝廷は殊に殊恩を沛ぎ伯爵に晋封し綸扉に翊賛し復た直隸總督を命じ兼て北洋大臣に充てたりしに艱難を匡濟し和を中外に輯て老成國を謀り深衷を具有せり去年京師の變特に該大學士を派して全權大臣と爲せしに各國使臣と和約を安定し悉く機宜に合し方に大局全く定まり懋賞に榮膺するを冀ひたりしに茲に溘逝せりと聞き震悼良に深し李鴻章は先づ恩を加へ大學士の例に照して賜卹し陀羅經被を賞給し恭親王の偉を派し付衛十員を帶領して前往奠醊し諡を文忠と與へ大傅を追贈し一等侯爵に晋封し賢良祠に入祀し以て盡臣を篤念するの至意を示さしむ其餘飾の終典は更に旨を陳すべし此を欽めよ

越えて二十日國葬の禮を以て葬らる、一代の風雲兒は此の如くにして長逝し遂に歴史上の人となれり、噫。

第九 餘談

李鴻章の逸話餘談として世に傳へらるゝもの甚だ多からず、暫く余輩が耳目に觸るゝもの二三を載す、思ふに今後此の種の話柄は續出するなるべし、請ふ他日に於て補充所あらん。

(一) 英將戈登、李の不信を怒る

髮匪の亂、官軍隙を窺ひ蘇州城を圍むや、常勝軍六千餘、其の他官兵一萬餘を以て猛攻す、敵中に在る西人數名命を喪はんとを恐れ、書を作りて常勝軍の總督戈登に贈りて曰く、請ふ閣下舊交を念ひ、以て吾輩を救ひ、安穩に上海に護送することを願承せらるゝに於ては、吾輩閣下の軍に下り、又敵將を諭して降伏せしむべしと、戈登

大に喜び、直に之を諾して上海に護送せり。

此の時城中に五敵王あり、慕王譚紹光、納王鄧冰寬、北王貴文、康王汪安均、汪王周文佳是れなり、紹光斷然降伏の議を不可とす、曰く、我輩南邊に起り、遠く北邊に達し、千圓萬戰、硝煙彈雨の中に起伏し、幾多の苦辛艱難を経て太平天國を創立したるは、暴政苛虐の滿清政府を顛覆し、民人を塗炭の裡より救はんとすればなり、今反覆表裏の妖官の言を聞き、おめく、面縛して降らんとするは何事ぞや、且夫れ李鴻章は元來嫉忌の人なり、戈登これを知らずして欺かるゝのみ、我輩降るも鴻章豈に命を全うするものならんや、今の計を爲すもの唯々城を枕にして死するあらむのみ、何ぞ降るをいはんやと、四王聽かす、紹光罵つて曰く、諸君盲せり、必らず悔ゆるの時あらんと、四王竊かに謀りて紹光を殺し、其の首を提げて降る。

是より先き戈登、李鴻章に説き降將を殺すことなからしむ、李曰く余固より殺戮を好むにあらず、決して言を食はずと、四王降るに及び、頗る驕傲なり、又髮を斷つて

とを肯せず、李乃ち悉く之を誅す。

戈登これを聞き、大に怒つて曰く、豚尾奴我れを欺く、我れ誓つて豚尾政府の爲めに力を致さずと、戈登部下の士、李が營を叩き呼んで曰く、我輩食言の將を斬り、主將の爲めに耻辱を雪がん、李大に窮し、服を變じて後門より脱し、僅かに其の厄を免かる。

是に於て西人復多く敵に投ずるものあり、敵勢再び振ふ、朝廷詔を下し、戈登を江蘇軍の將に封じ、一等勳章を授け、黄金一萬兩を賞し、再び常勝軍を指揮せしむ、李も亦降將の狀を説き、之を慰解す、戈登乃ち勳章を受けて黄金を辭し、又軍を督す、李鴻章が戦勝の功は、大半英將戈登の力なり。

(二) 戈登、李に獨立を勸む

今より二十一年前、戈登將軍が未だ亞弗利加遠征に就かざる時、李鴻章を訪ひ來り、數月の間天津に滞在せり、當時露國は土地侵略的戰爭を支那に加へんとするの形勢な

りしかば、李鴻章は此に對する政策を彼の勇敢なる將軍に圖れり。
 武士肌にして、迷信家にして、冒險好きなる將軍は李に説くに、兵を率ゐて北京に
 入り、滿清の帝統を顛覆して、自から支那皇帝の位に即かんことを謀るべし、余は傍
 に在りて助力の勞を執らんことを以てせり、李は蒼白なる顔色を爲して大に耳を傾け
 たりと。

若し李鴻章にして、將軍に勸告に従ひしならば、北京政府の顛覆は實に容易なりし
 ならん、而して新帝王の下に於ける支那は、世界に於て異なる位置を占めしなら
 ん、されど此の時に於ける李鴻章は、最早青年にあらずして、既に冒險的精神を失な
 ひたりき、而して朝廷は渠れが一族に非常なる榮譽を與へ、現に渠れの弟(李鶴章)は
 總督に任せられ居れり、假どひ李は功名心によりて滿されたりとも、感恩の情は未だ
 死せざりしならん、加之李には他に一箇の考へあり、即ち戈登の劔によりて建てら
 れたる帝位は、又戈登が劔によりて保たれ、恰かも彼の印度の王侯の如く、一英人の

徒弟として制御せらるゝに至らんことを恐れしならん
 天津に在りて李鴻章と戈登將軍との密談屢々なることは露國政府に聞え、北京政府
 も亦大に心安からざるもの、如し、露政府は殊に猜忌する所あり、之を英國政府に訴
 へしかば、英國首相グラトストン氏は戈登將軍に命じて天津を去らしめ、右の密談
 も事なくして止むに至れり。

(三) 曾國藩と李鴻章

李鴻章が曾國藩に傾心せしことは一通りならざりき、渠れが出身の門閥に於て左
 もあるべきこと、云ひながらも、何人に對しても擲論弄を辭せざるの渠れが、曾を
 見ること獨り嚴父の如くなるに至りては、適々曾文正の人物の偉なるを見るべきなり。
 曾國藩の薨するや、李鴻章は長文の奏疏を呈し、曾が偉烈を彰表せんことを乞へり、
 其の文辭雄大、洵に文正の勳業を傳ふるに足れり、又曾が六十の壽に、鴻章序を贈り
 て之を慶す、中に左の如き文字あり。

方公之在京師也。鴻章以文學爲公知。及其出治賊也。復從公治兵事。賴公力始定蘇川。繼平河北。其後以同治七年冬。還并公於金陵。而公方移節直隸。及公以今歲登六十壽。而鴻章乃奉命赴點贊師。以公之爲人慕望如彼。而鴻章之於公也。又如此。固宜鴻章之忤々於其心者。雖然方今中外所待治於公者尙衆。而公所身係斯世之故者。方益鉅。若鴻章者。自度固不足任此。則惟祝公眉壽蕃祉。永々無有涯極。

是れ豈に一片の諛辭ならんや、世人或は云ふ左宗棠は曾門の武を傳へ、李鴻章は其の文を傳ふと、蓋し然るものありて存するなり。

(四) 曾國藩の評

李鴻章の曾國藩に代りて直隸總督となるや、人あり國藩に問ふに李鴻章の人物を以てす、國藩曰く之子天の寵運兒なりと、蓋し李の人と爲りや、學問必ずしも深きにあ

らず、識見必ずしも大なるにあらず、一朝風雲に乗じ、手に唾して功名を取る、殆んど人力にあらざるものあるが如し、天の寵兒にあらずんば、安くんぞ能く此に至らんや、此の點に就いては、大に我が伊藤博文氏に似たるものあり、而して彼れは戰敗を以て一世の名譽を貶し、此は戰勝國の宰相を以て侯爵大勳位の榮光を保つ、所謂倖運兒なるものも亦遇不遇あるなり。

(五) 李鴻章の詩

中外に傳ふる者甚だ稀なり、偶々同館試帖選と云ふ書を見るに、中に道光丁未の科に、李鴻章の詩一首あり、題は麥天晨氣潤の五字にして趙師民の詩の「麥天景氣潤、槐夏午陰清」と云ふより取りたる者なり、應試の作なれば五言八韻の詩たるは云ふ迄もなし

麥天晨氣潤

麥氣新添潤。凌晨漠漠連。微草芳艸地。宿雨落花天。曉色涼于水。晴光嫩似烟。

黃翻雲影活。翠滄露華鮮。淺痕麟隱膝。清音雉隴圓。暖蒸初日外。爽迥早秋前。箕笠黏香細。團林蘆采妍。兩岐豐瑞兆。淑景譜薰絃。

而して其下に「寫上四字。却句句均有一潤字在內。其用筆之秀活。其練字之工雅。令人愛不釋手。自是君身有仙骨。信然」の評あり、其の詩を玩味するに、如何にも秀情工緻にして、翩翩たる才子の筆なり、當時にありて、誰れか此の一少年秀才が、他日四百餘州を一肩に擔ふの、老怪物となるを預知せんや。(日本新聞)

(六) 李の政治癖

道樂といへば語弊があるかも知れぬが、彼れの道樂は唯だ一の政治である、政治より他には何にも道樂がないと云ふて宜しい、恰かも日本の伊藤大隈といふやうなもので其の朝にあると野にゐるとを問はず、朝夕政治にばかり、身を委ねて居る、伊藤大隈にして、假りに一切政治上の談論事業を禁遏せられたならば、二人とも氣鬱病を起すであらう、李鴻章も其の通りです、要路にある時も、閑地にある時も、口政治談を

絶たない、無官無資格の時でも、矢張り依然として、外國公使と交際して居る、政治より他には何の道樂もないのです。(前駐清公使矢野文雄氏談)

(七) 李の風采

彼れは近年大分腰が曲がつて居つたが、常人よりも體格が大きく、所謂堂々たるもので、其の容貌といはんより、寧ろ全躰の風采に於て、何處かに異彩を帯びて居る所がある、蓋し中興の當時より、死生の間に出入し、身を國事に委して四十餘年間、大機に參與した、其の經歷が自から彼れを非凡ならしめたところはあつた。(同上)

(八) 李の性急

彼の舉動は急劇にして平穩ならず、時としては輕卒にさへ流るゝことあり、彼が激怒する時は恰かもフレデリック大王の父君の如く、脱靴器を飛ばし、棒を振り、其の傍に侍せるもの纒に逃避して以て其の危難を免るゝを得るが如き殺風景を演ずることあり、(前支那駐劄米國公使ジョン、ラッセル、ヤング氏談)

(九) 李の細心
 彼れは心を萬事に配りぬ、天津より北京に達する電文に至るまで、其の目を通さるはなし、時としては受電者に其の意味を問ひ合はすことすらありと云ふ、嘗て一外國公使が其の家族のものゝ死去せしことをば毫も知らずありしに、李鴻章が弔使によりて初めて知れることありき、是れ即ち受電者に達せざる前に彼れの見る所となりたる故なり。(同上)

(十) 李の迷信

李鴻章は純然たる支那人にして、其の同族を同じく迷信より免るゝ能はざるものゝ如し、彼れが一蛇を祈念したりと云ふ奇談は、外交社會の談柄となり居れりき、されど是れ等の奇談は、此の種の人物には敢て珍しからざることにて、ナホレラン、クロムウエルにも亦これの類する奇談ありしと云ふ。(同上)

(十一) 李の敵愾心

彼れ一たび口を開く時には、慷慨悲憤、痛言激語せざるなかりき、英國が鴉片戦争に於ける、日本が臺灣征伐に於ける、露國が北境侵畧に於ける、佛國が東京入寇に於ける、一も支那の支邦なしと云へり(同上)日清戦争後の彼れは果して如何の感想を持ちしにや、

(十二) 李の精刻

彼れと共に事務を執る事は實に容易の事にあらず、然れども彼れは確に言行一致の人物なり、彼れは一問題を再三繰返して精密に之を精査し、其の返答に些の誤謬あれば、直に之を詰問し毫も用捨せざる人なり、彼れは相互の間に、認諾、保證及び默契等の如きものゝ存するを許さざる人なり、殘忍無情なる高利貸も、彼れの如くには證文の讀方を嚴密にせざるべし、彼れに對しては諂諛も恐嚇も其の益なきなり、(同上)

(十三) 母の喪に於ける李鴻章

支那人の習慣として、父母死せる時には、其の子たるもの必らず己が業務を抛て、

祖先の墳墓に歸り、數月の間、衣食を粗にして、以て哀悼の意を表せり、是れ他國人に比して彼等の孝心厚き一證なり、余が(ヤンク氏自身を指す)公使として支那に在りし際、一の疑問の其の政治社會、殊に政府反對者の中に起りたりき、即ち李鴻章の母にして死せば、彼れ之に對して如何に處置するやの疑問なりき、而して彼れの母は當時九十有餘の高齡なれば、此の世を去る實に遠きにあらざるべし、若し此の時に至らば彼れは凡ての職を捨てざるべからざるを以て、實に政治上の變動は此の時に起るべきを以てなり。

時は來れり、李鴻章は彼の弟を伴ふて母の喪に服せんが爲めに己か故郷に急げり、反對家は直に代りて權を執らんとせり、俄然一片の勅令、李鴻章の頭上に降り來れり、母の喪を脱し三箇月の後、再び其の官職に就けよと、此の如き事は未だ曾て有らざる所のものなれば、支那人に取りては恰かも羅馬法皇が、一聖餐式を欠きたるもの、如くに感じられたるならん、されど皇帝は神聖にして侵すべからざるものなり、皇帝の

命には何事をも服従せざるべからず、彼れの弟は猶止りて喪に服することを許されたれども、李鴻章は終に天津に還らざるを得ざるに至れり。

此の勅令發布の時、余は芝罘に在りしが、或朝李鴻章の快艇着港したりとの報に接せしかば、余は直に使を送りて明朝訪問の諾否を問はしめたるに、彼れの屬官は懇切なる招待の意を齎し來り、余と相會するの切なる旨を通じたり。

余の想像には、喪服中の租なる衣食、肉牀の辛苦と云ふも、極めて輕微にして單に感情的のものならん、然るに彼れを見に及で、實に其の悲痛の甚しきを見たり、而して彼れは恰かも餓えたる乞丐の如く、極めて卑賤なる衣服を着け、鬚髯頭髮を理めず、悲哀の色を顔に刻み、手は恰かも死灰の裡にありたるもの、如く汚れ居れり、彼れは常に華美好める紳士なりしに、且支那第一流の人物なりしに、恰かも下賤なるもの、如くに、苦痛を忍びて風教に遵ひたるを見たりき、其の後余は天津に於て彼れを見たる時には、乞丐の容貌全く消失して、例の華麗全備の紳士なりき、是を以て

李が孝心の厚き、遺教に忠實なるを知るに足るべし。(同上)

(十四) 外國人に對する李鴻章

李は諸外國に對しては、毫も親愛の意を表することなく、毫も好感情を呈することなし、若し外國人の中にて渠れの感情を動かし得たるものありとせば、僅に戈登とグランドの二將軍ありしのみならん、李が大概の外國人に對するは恰かも店頭に坐する一商人の如し、唯最も利益あらんことを欲するのみ、汝は汝の爲めに謀れ、余は支那の利益を謀らんのみと云ふの風ありき、而しては彼れは事實に關して、徒らに議論を上下して以て誇るにあらず、唯事實の明白なるを見れば、慄慄の勇氣を鼓して、以て其の結局を見ざれば止まざるの風ありき、是れ他の東洋政治家に於て見ざるの特點なり。

(十五) グランド將軍と李鴻章

グランド將軍の東遊するや、李鴻章が之を款待したるは非常のものなりき、蓋し將

軍が南北戦争に大功を奏したるは、李が内亂戡定と境遇相似たるものあるのみならず、將軍の謹厚なる深く渠れが敬愛を牽きしならむ、渠れは將軍に向つて種々の助言と意見とを求めたり、我が琉球事件の仲裁を依頼したるも此の時なりき。

グランド將軍が天津に到着するや、未だ上陸せざる内に李は崇敬の情を盡くして訪問せり、將軍が其の返禮の爲めに渠れを訪問したる時は、渠れは一隊の護衛兵と、黄絹を以て縫ひたる公橋とを以て歓迎したりき、蓋し黄色は支那帝室の用色にして皇帝又は皇族にあらざるよりは之を用ゆるを許されざるものなり、然るに渠れは之を將軍に與へたれば、天津市民は目を側て、黄絹の過ぐるを見たりき、李が如何ばかり將軍に傾心したるや知るべし。

(十六) 副島伯と李鴻章

副島伯が大使として天津に赴き、條約締結の談判を開くや、李鴻章大に伯を敬重し以て東方第一の人物と爲す、而して故大久保甲東に對しては却つて儼焉たりしものあり。

りしと云ふ、是れ一聞甚だ奇なるが如しと雖も、李の識見よませば、或はさもありし
 ならんと思はる、蓋し副島伯は本邦の老儒にして、其の素修最も支那人の崇敬を享
 くるに足り、加ふるに恪勤剛毅の風度、曾文正に似たるなしとせず、李が敬重せる豈
 に故なしとせんや、甲東一代の巨人なりと雖も、副島伯の文辭なきを如何ともする能
 はざるなり。
 又、故陸奥伯の評、
 馬關に於ける媾和談判の時、彼我の全權初會見を畢へて後、故陸奥伯人に語りて曰
 く、彼れは古稀以上の齡にも似ず、活潑にして應對自在なり、其の老猶なる處、却つ
 て愛すべきを覺ゆ、明治の初年、我が使節の北京に派遣せられし時、先輩の曾國藩が
 彼に書を興へて、卿が容貌と辭令とは、日本の使節を壓するに足るべしと云へるは、
 真に彼れの自負せる所を穿ち得て妙なりと。
 又、
 李鴻章が馬關に於て暴漢の襲撃に遇ふや、隨行員某其の創血の淋漓として、衣袍を

染るを見て、是れ報國の血なりといひければ、李は余死して國に利するあらば、餘命
 惜むに足らずと慷慨せしとぞ、果然李の血は、無條件休戰の利益を得たるのみならず、
 是れを以て同情を中外に買ひ、禍を轉じて福とするを得たり、李若し地下に小山豊太
 郎に會は、呵々大笑して足下は余が忠僕なりと云ふなるべし。

(十九) 安徽と長州
 馬關談判の席上、李は我が伊藤全權が長門の出身なりと聞き、長門は人物輩出の地
 なりと揚ぐると一番す、伊藤伯之に答へて、敢て貴國湖南安徽兩省より出し人物は比
 せぬと謙遜すれば、李は湖南は貴國の薩摩の如く武功を尙び、安徽は却て長門に似た
 り、然れども同日の比にあらずして劣るもの多しと云へり、優劣如何は未だ容易に判
 知すべからずと雖も、言ひ得て亦的確なりと謂ふべし。

(二十) 李、伊藤伯を擁護す
 李、伊藤伯を擁護す

馬關談判の際、議償金に入るや、李は全力を盡して軽減せんと乞ふ、我が伊藤全權
 執て可ずして曰く、清國の土地、日本に十倍し、其の人口は四億を起ゆ、何ぞ財源な
 しと云ふを得んや、國家に急難あれば、人材隨ふて輩出す、以て財源を開くべく、以
 て國を富ますべしと、李忽ちこれを抑擲して曰く、清國若し貴大臣を請ふて首相とせ
 ば如何と、伊藤もさるもの微笑を含みて、試みに我が皇上に奏請せられよ、本大臣も
 敢て其の行を辭せざらんと、李は奏請するとも許さるゝこと覺束なく、唯だ假りに身
 を清國に置き、困難の事情を諒察せよと、又媿々として哀訴す、其の老猾にして人を
 股掌の間に弄すること此の如し。

(二十一) 伊藤に一矢を酬ひらるるは、李の言に對して、李は曰く、營口の如きは、現に海關稅の財源あ
 るに、貴國は既に償金を要求したる上、又これを奪はんとせらるゝは、恰かも幼兒の
 含む乳房を奪ふに均しく、之をして斃れもひるの外なしと、伊藤冷笑して曰く、否々

堂々たる大清帝國、豈に幼兒を以て比すべけんやと、道がの羅爺苦笑良久す。

(二十二) 紐育に於ける李鴻章

露國皇帝戴冠式の當時、余(記者自身を指す)は正に紐育にありて東亞二大帝國の大
 使を送迎したりき、日本大使山縣侯が露國に赴むかんとして紐育を過ぎるや、市民は
 日清戰爭の凱旋將軍とし、争ひて優遇したり、清國大使李鴻章の露國より歸途、紐育
 に來るや、市民は多年音に聴く支那の所謂一大政治家を見んとし、寧ろ好奇心を以
 て彼れ歡迎したり、而して彼等二大使が紐育を去りたる後、米國人にイムブレスス(銘
 刻)したる痕跡に就て見るに、實に李鴻章の偉大なるを感せざるを得ざるものありし
 なり。

山縣大使は只管に謙讓し、宴席を避け、儀仗兵を辭し、出來得る限り外出を避けてウ
 ランドーフ旅館の樓上に籠居し、而して翌朝歐洲に向つて、出帆せんとする其の夕僅
 に市内の有力者十數人を招き、義理一片の宴會を開き、未明三時といふに倉皇として

汽船に搭じ、明くれは紐育埠頭波白くして山縣大使の影だに無く、市民又誰ありて彼れを語るものあらざりき、凱旋將軍は敗軍の將の如く、謙遜に過ぎて宛ながら米國人の股下を匍匐して過ぎたるが如きものありたり。

李鴻章が紐育に達するや、彼れは巡查十數人に輿を昇がしめて船より下り、直ちに一隊の儀仗兵に先導せられてウラルドーフに入り、旅館の屋頭に黃龍旗を翻へし、彼れを見んと欲して堵の如くに來集せる群衆を三階のベランダより見下して傲然たりき、一週日餘、日毎に儀仗兵を先導とし、雲霧の如き見物人の間を過ぎて四方を見物し、或は支那人街に行きて支那人に向ひ、米國に在りて何事も不都合なきかと問ひ或はグラントの墓に詣で、今昔を追懐し、或は市廳に招かれり歡迎會の席上に、市長ストロングを揶揄し、巨人の歩武を以て、米人の頭上を横行濶歩しつゝ過ぎたり、新聞紙は彼を千様萬態に描寫し、彼れの片言隻句をも争ふて掲載し、彼れが毎日の食膳をも一々に報道したりき、初め好奇心を以て彼れを迎へたる米國人は遂に彼れを偉人と

し敬仰し、尊崇するに至りたりしなり(日本新聞記者鬼山氏)

(二十三) グラント將軍を追慕す

前項鬼山子の記中にも、李鴻章がグラント將軍の墓に詣でしことを記されたるが、李が將軍と一たび會見したる後、これを追慕するの情は極めて切にして、凡そ駐清米國公使にして李と會見する毎に、談將軍のことに及ばざることなく、其の歸國に際しでは、將軍の家族を見舞ふべきを依頼されざるものはなしと云へり、紐育紀念碑建設の舉あるを聞くや、李は直ちに五百弗を寄附したりき、而して將軍の紀念日に會する毎に、李鴻章が追慕の情を表したる數個の花は、リッズリースайдなる將軍の墓前に供せられたりと云ふ、李が一生眞實に敬愛尊崇せしは唯二人なるか如し、曰く會國藩、曰くグラント、

(二十四) 微候と語る

李鴻章の露帝の戴冠式に赴くや、獨逸を過ぎり、ピスマーの侯の小宴に招かれて

一夕の款語を交じへたり、此の東西二傑の會合は深く人々の視聽を惹き、當時歐洲新聞紙は畫像を挿入して細かに其の談話を傳へたり。

李伯は微侯の健康を問ひたる後、談緒を支那政治上に轉じて、微侯の助言を求めたり、微侯は之に答ふるに、宰相たるものは決して宮庭の意に逆ふべからず、宰相は主權者を輔翼し、謀猷を献ずるの職分を有するのみなるを以てしたり、李伯は再び、主權者若し反對者を親近して己れの言議が毫も行はれざる、時は如何と問ひしに、微侯は兵力を以て反對者を強制すべきのみ、而かも其れに要する軍隊は多きを須ひず、只五萬を有すれば足れり、然れども極めて精銳にして、且最とも手近に置き、一令の下に敏活なる運動を初むるの準備は常に整ひ置かざるべからずと語りたまふ。

微侯が例の鐵血政略の講義に李伯は頗る傾聴せしもの、如く、少時ありて慨然として言ふ、我れ獨逸に來り、其の軍隊の精銳なるを見て、興國の偶然ならざるを知る、我が邦の軍政振はざる久し、我れこれを改革せんと企て屬を建議せしところなるも、

情實纏綿、今に至るまで遂に行ふ能はず、所謂る滿州八旗等の積弊を指すならん、今後本國に歸りて、斷然閣下の指授の如くすべしと、然れども李は間もなく兩廣總督に貶せられ、終に指を革新に染むること能はず、八旗綠營九十萬の穀潰しは今猶依然として存在するなり、李の遺憶知るべし。

（二十五） グランド將軍の評言
グランド將軍の李伯を見るや、退いて人に語つて曰く、余が世界に於て目のあたり見たる大なる人物は四人あり、獨のビスマルク、英のピルゴンス、佛のボベツタ、及び今回會見したる李鴻章是なりと、將軍も亦李伯に感服せる多きが如し、評の適否は今論するに限らず。

（二十六） 李の書風
少筌書を善くするも多く人の爲に書かず需むるものあれば必らず幕僚に命じて代書せしむるを常とす幕僚に能書家あり亦能く少筌の書風を摹し殆んど人をして其真蹟を

辨する能はさらしむ故に需むる者、毎に少筌の眞筆を得たりとして之を喜び賞愛持かざるも何んぞ知んや。又賈なるものに係るを我邦人の北京に遊べるもの少筌の名物男たるを以て必らず往き訪へば亦多く其書を請ふ請へば必らず諾せらる然れども此手を喰はざるもの殆んど稀なりと云ふ此言實に其幕僚某氏より實聞せし所なれば應さに虚言にあらざるべし少筌の書、婀娜柔媚の態多く其人と爲りの沈毅なるに類せざるは一奇と云ふべし蓋清朝の書風に二派あり一は碑版より入りしものにして他は帖學よりせしもの也帖學よりせしものは清朝の定格とも稱すべきものにて其淵源は康熙乾隆兩帝の帖學を愛好し殊に趙董を喜びたるに出でたるものなり專制王朝の常として上の好む所、下必らず之に化し沿々として風を爲せしこと固より怪むに足らず碑版の體は書法に於ては固に漢魏の正體たるべしと雖清廷に於ては乾嘉の際より漸く之を好むの士輩出したるも猶ほ世人は視て怪と爲し概して文人雅客の餘緒とせしに過ぎず然れば少筌の書風も亦純然たる帖學に局するものにあらずと雖、小楷格式を以て交官登用

試験に及第せし位なれば猶ほ其範圍を脱出すること能はず是其の媚態多く屢々人をして其俗氣饒きを惜まじむる所以なるべし然れども其外交に於ける搏虎捉龍の概ある手腕を以て三寸不律の毛管に托して婀娜柔媚の態を作るもの亦寧ろ其の賞愛するに値する所ならんか。(東京日々)

(二十七) 李鴻章の外交遺策

講和議定書調印後李鴻章は身軀頗る衰弱し久しきを保つ能はざるを知るや竊に一秘書に命じて其外交方針を書せしめ清曆八月廿日付を以て榮祿の許に送附せしめたる秘書の大要左の如しと流布するものあり好事家の假作なりや否やは知らず清廷の僚臣動もすれば瀟州を以て露に讓附す可からずと云ふも是誠に事機に暗き論なり東三省一帯を露に讓るも決して憂虞とする所にあらず蓋し瀟州にして露に屬せんか日本は必らず韓半島を握占し纏て此二強國は壤土を接し互に其の勢力を擴張せんと欲し遂に數年に出でずして相闘争するに至る可し其結果日本にし

て斃るゝの形勢あらんか中國は直ちに露に援兵を送り共に俱に日本を全滅す可し然らば露國は大に中國を德として自國は朝鮮を握占し滿州は中國に還付す可し之れに反し露國にして敗るゝの姿を呈せんか中國は直ちに日本に聲援すると號し露兵を滿州より驅逐せば中國は坐から其回復を得べし是殆んど必至の勢にして毫も遲疑を要せず宜しく果斷す可き也英國の如きも滿州に對し強硬の態度を装へども是れ畏るゝに足らず彼れは兵力に訴へても其主張を貫かんとするものにあらず獨は中立佛は傍觀米は沈黙凡そ是等の諸國は無關係と云ふも詭言にあらず南方の諸總督好んで異議を挾ひも彼等は外交政策の何たるを解せざるものなり願はくは脚勉めて諸總督の説をして西太后及び皇帝の聖聰に達せしむる勿れ予老齡頹衰惟ふに久しきを保つ能はざるを知る予逝くの日は卿宜しく其遺策を繼承し又宜しく袁世凱を以て卿の補翼たらしむ可きなり。

(二十八) 李鴻章の外交遺策 (再び)

李が病革りて榮祿に密書を送り其外交策を吩咐せしは上配の如くなるが更に袁世凱に送れりといふの書簡あり大要左の如し

媾和約款既に終結したるも中國の外交は今後滋々紛難を加ふるの憂あり列強は各其利益に向て中國に侵襲せんとす宜しく之に對し機變の處辨を行ふ可し然るに予老齡にして體軀衰弱氣力動もすれば強毅を持し難し惟か自ら長く政務の煩に當る能はざる可きか顧みるに朝廷の僚臣迂迷にして中外の形勢を諳んせず或は剛強自から悦び列國の意嚮を測らず或は輕薄浮弱務めて外人に阿媚せんとす真に悲し可きなり予に繼で立ち内外政務の煩累に任ずる者卿を措てあらざる可し願はくは卿能く此意を體し以て務むる所あらば誠に中國の爲めに喜ぶ可きなり思ふに外交の要は宇内の形勢に通じ表裏を穿つにあり中國と境壤を接し或は關繫深き者露英を第一とし獨佛米及日本之に次ぐ或は謂はん日本は中國の隣邦にして兵及精英最とも恐る可しと然れども日本は自ら主動者となり中國に接する事稀にして多くは英米と聯接せり故に

若し日本にして極めて強硬の態度を執りて我れに折衝するあらんか必ずや其背後に他の某國あるを觀破す可きなり目下中國の前途に横はる案件は東三省の所辨にあり予之に就ては榮祿に知照する處あり惟だ榮祿や能く一定の主張を維持す可し然れども之を實行するに當り變に通じ機に應じ以て誤るなきを保し難し願はくは卿の敏活能く之を輔翼せよ夫れ滿洲を露國に讓附するに當り之が異議を挾む者英國及日本なり然れども英國は極めて商利を尙ふ故に其の商利を阻害せざれば彼も強て異論を主張せざる可し而して其手段は變通百端豫め規墨し難く宜しく實際に當り勘考す可きなり又日本は究竟高麗半島を獲占するにあり露國は能く茲に鑑察する所あらん只恐る可きは南方諸總督の濫に奏議するにあり然れども既に榮祿に知照して依囑する所ありたり若し予不幸にして長逝せんか卿の自ら奮起するにあらずんば中國をして泰山の安きに措き難し而して卿繼で其印綬を帶ぶるの日は前顯の意を酌察し以て能く之れを處せ獨、佛、米の諸國亦各特質あり其表裏を觀察するに怠る勿れ外交の

要は一國を以て他國を制せしめ以て中國に煩を及ぼさしむるにあるは喋々を咲たす國交の大局に接するは極めて思慮を要す願はくは卿自ら保し以て予の依頼に背かぬ勿れ。 (三十九) 副島伯談片

李鴻章は嘗て自分に對つて曰く、内事は民と休息する積で處する外交の事は柔克剛を制する積で行ると云はれた。

清佛戰爭以來彼は稍愛親覺羅氏の信任を失した様で其頃から少しづつ、勢力が墜ちて日清戰爭に迫んで益々其名譽を損じた様である、彼は嘗て私に云はれたことがある、支那が日本人から侮を受けるのは忽必烈の罪だ、日本の様な一孤島を取つて我物にしても役に立たぬのを是非取らうとして負けた故に日本人から侮らるゝに至つたのだと云つた。(中央新聞)

李の性質 (三十一)

彼は喜怒哀色に表はさずといふ様な人物でなく寧ろ豪放磊落といふ方である、であるから其の襟度快澗を示すがために却つて失敗する事は幾度もあつた、磊落を衒ふといふわけでもなからうが兎も角東洋の豪傑流を喜んで居つたに違ひない、此のために彼は秘密を漏らすといふて各國公使に怒られた事もある今ま一つは中々にツウツウしい所がある彼は内官でないから政府内の勢力は弱い而して登科の官に當つた事がないから門弟は少ない故に時として民間に下らなければならぬ時もあるのである然し此の時でも少しも屈せぬ、彼れは嚴冬最も寒い時に黄河の測量を命せられたとがあつた通常の人なら老體でもあり寒天でもあり不急の事業でもあり且つは李鴻章如き人物に土木の監視の様なもの命じたのだから誰しも憤然として辭する所であるが、彼は平氣でボツ／＼やつて行つた、直隸總督なんといふ名譽の官に居つたのが突然兩江總督なとに左遷された事がある其れも平氣で黙つて任所に赴く斯の如く彼れは至つてツウツウしい人間であつた(矢野文雄氏の談報知新聞)

(三十一) 李の匪躬

李鴻章は幹樞強壯なりと雖、も老來意氣漸く消磨せり、這回列國との議定協商に従事するや、音聲嗄嘶、二兒童に扶けられ僅に人に對面せる得る程にて、毎日電氣療治を施して神經を興奮せしめつゝありしと、拮据經營、蹇々匪躬死に至つて止まず、古大臣の風ありと謂ふべし、死するの日、電奏して己が後任を薦舉したりと云ふ、

(三十二) 臨終奇談

支那新聞の報ずる所に依ば、李中堂此次の病症は肺癰にして前日來屢々吐血したるは全く此が爲なりき、聞く病勢の革たまりたるとき役員推選名簿の到れるを見て、折角の衆勞を空おせんことを恐れ之れを披かんとしたる途端忽然卒倒したりと、而して醒めて曰く毓賢は國賊(義和團の首魁にして山西巡撫のとき革職を命せらるる右推選名簿にその人名ありたるや否やは知らず)此の收拾すべからざるの大禍を惹起したり、東三省の事尙は未だ定まらず、兩宮亦た回京を肯せずと、此に至つて長太息已まず

其聲漸く微にして復た暈し竟に醒めず
 又曰く李相臨終の時、布政使局馥、提督馬玉崑、旁に在り國事を問ふに及んで、口言ふこと不能と雖も涙涕せざるなし、尤も奇なるものは眼既に閉づ周馥笑つて曰く我尙は言ふべきことあり何ぞ俄に氣絶するを見るやと、中堂眼乃ち開く、或人周馥を戒めて曰く徒に難言を以て相心を苦しめんよりは寧ろ之を慰諭するに如かずと、周馥乃ち曰く露國公使言ふ李中堂去るの後断じて中國を苦しめずと、又慶親王よりの來電を傳ふ十月の内、兩宮必ず北京に回らんと、中堂之を聞て頗る安心したるもの、如く双眼竟に閉づ。(日本)

(三十三) 李家の財産

李鴻章の財産は、世界有数のものにして、四億兩に達すと云ふ、而して此の巨大なる財産を如何にして贏し得たると云ふに至りては、其の形迹固より分明ならず、是に於て乎揣摩臆測雜然として起り、近頃二六新報に記載せる如き、頗る珍奇にして小

説的趣味を帯べる附會さへ傳へらるゝに至る、曰く。

李鴻章が四億兩の資産を有て居ることは、名高い話ぢやが、斯く巨富を致したのは、役人をして賄賂を貪つたのも有らうが、丁稚の時から金持で有つた、彼れ父李進文は放蕩無頼で、家産を蕩盡し、彼れを膝下に居らしめ兼ねて、十五の時に周里根と云ふ米商の丁稚にした、彼れは一夜策を設けて、強盜十數名を捕縛し、周から十萬兩を得た、翌年村長に爲り、十七の時更に商人に爲つて十八萬五千兩を贏け、又石炭を浙東に輸して二十五萬兩を贏け、十八の時油を積み出して又贏け、夫から二十一の時、向一社といふ木綿會社を立て、社長となり、半年の後米商と爲り、二十三の時資産百八十萬兩を有し、三年の後二百五十萬兩に増したのぢやから、七十九の年迄に四億兩の富を致したのは、田中光顯が役人をしてる計りで五十萬圓以上の富を致しにのとは同日の談でないど某支那通の話

此の説は上村某の筆に成れる、二十年前の大阪の出版物に出づ、中には麗々しく所

調る奇策なるすら載せあり、其の筋書を掻い摘まめば左の如し、

強盜等李鴻章を捉えて、金を藏する處を鞫問す、鴻章給いて曰く、僕能く金の在る處を知れり、公等をして之を獲せしめん、只願くは僕くに少許を分てど、乃ち箱數箇を出して強盜の前に列ね、是れは金なり、彼れは銀なりと告ぐ、盜喜び其の蓋を發かんとするに臨み、鴻章手早く携へたる燈火を箱の中に投ず、箱固より火薬を盛る、轟然爆發して衆賊皆斃る云々、

李鴻章これに因りて十萬兩の賞を得たりと云ふが如き、宛然たる一箇の小説、其の信すべからざるは言を俟たず、且夫れ此の説の如くせば、鴻章は十五の成童より、常に牙籌を事とし、讀書に光陰を送りし日はあるべからず、既に記すが如く、支那の科擧の文は、其の形式の煩瑣なる吾人想像の外に在り、若し些少にても式に違ふものあれば、容赦なく落第せしむるを常とす、加之、科擧には數級の階段あり、一躍して進士たるは決して得べからず、擧人輩の擧生刻苦するは乃ち之が爲めなり、李鴻章如

何に聰明敏智なりとも、牙籌を執りて巨利を博するの傍、應擧の準備を全うするを得んや、要するに此の如き小説的說話を傳ふるに至りたるは、鴻章が夙慧を事々しく吹聴せんとする例の支那的法螺に過ぎざるなり。

然ば則ち李鴻章は如何にして巨金を蓄へ得たるか、矢野前駐清公使の談は左の如し、彼の財産は世に言ふ通り三億兩を持て居るや否やは疑問であるが、何にせよ資金は甚だ富饒であるに相違ない、然らば彼れは果して貨殖の道を謀り、之に力めたかといふに決してさうでない、多少其の考へも無いではなかつたらうが、自ら貨殖に苦心した所はない、支那の弊として、中央政府にあるもの即ち内官は、中々金儲けが出来ぬが、外官即ち北洋大臣とか、直隸總督とかで居れば、一土工事を起しても、賄賂は澤山取れるので、李にして若し貨殖に志あれば、今より數倍の富饒を見るによかつたのであらう、畢竟彼れは此の念に薄い、其部下の人々は自然に儲けさしてやつたのであらう、彼が邸宅、彼が居室も、さまでに立派で

ない、賢良寺の彼が住居などは、随分粗雑なもので、彼が服装も、随て構はぬ方で、頭に老人の徽章ともいふべき、ダイヤモンドがビカ／＼光つて居る許りである。右の談話は多少辯護的口を氣帯ぶるなきにあらざるも、大體の真相を得たるに近し。元來支那には、往古より安富と尊榮とを、混同一視するの弊あり、獨り支那のみならず、日本帝國も亦これに似たるなきにしもあらざるも、殊に支那に於て其の甚だしきを見る、例へば貧困洗ふが如く、一家死に瀕せるの人と雖も、一たび風雲に會つて好官を得れば、萬金の富、立ちどころに至る、是れ云ふまでもなく、賄賂といひ、誅求といひ、凡て瀆職濫權、官紀紊亂の事に屬す、而かも支那官民は、數百年因襲汚染の久しき、恬として之を怪まざるのみならず、寧ろ當然爲さるべき事と認定しつゝあるが如し、故に支那の大官小史、其の俸祿の微なる、衣食の資すら支ふるに足らざるべしと思惟せらるゝものすら、皆生計に綽々として餘裕を存す、察するに支那官吏の賄賂、誅求は一種無定限の報酬にして、朝廷も亦これを默許しあるに似たり、

是に於て富貴といひ貧賤といふの熟字の生ずるあるなり、支那人の思想よりすれば、富と貴とは是れ同物、貧と賤とは離るべからざるものと爲すは強ち無理とすべからず、世界中賄賂の公行するは、支那土耳其兩國を最とし、我が帝國も亦將に之に肩隨せんとす、従つて官吏てふ商賣の割合好きは他に比ぶべきものなきは論なし、況して李鴻章の如き、五十年間好地位を占斷せる以上は、其の資産の三四億に達せる必ずして怪しむを要せず、寧ろ矢野氏の言の如く、其の比較的の寡きを訝るべきなり、是れ決して余輩が臆測推斷の杜撰にあらず、渠れ李鴻章自から之を首白せしことあるなり、試みに左の一話に徴せよ、

二十七八年戦後、李鴻章が歐洲を巡遊せるの際、英國の一工場を觀、其の壯大なるに驚き、暫時睜目せるの後、忽ち案内の技師長に向て、奇問を發して曰く、此の壯大なる工場に長とならるゝ以上は、定めし多額の金贏けがあるなるべしと、技師長眞面目に答へて曰く、否、余は給料の外に何等の得る所なしと、李これを

解する能はざるもの、如く、更に技師長の指環を指さして、然らば貴君は如何にして其のダイヤモンドを得しかと、此の奇談は當時歐洲新聞紙の嘖々として傳唱せし所にして、眞個に支那的根性を赤裸々に剥き出して餘蘊なしと謂ふべし、適がの李中堂も問ふに落ちずして語るに落ちたり、奇なる哉、

李が貨殖の方法は、如何なる道に因りしか、其の好悪はさて置き、現在蓄積せるもの、我が岩崎三井等に什倍し、優に覇を世界に倡ふるに足るなり、渠れは此の鉅貨を擁しつゝ、甚麼の事業に向て資本を放下しあるか、

支那唯一の汽船會社は上海の招商局と爲す、是れ李が江蘇間の豪商大賈を説得し設立したる所にして、其の資本の大半は、李自からの投せるものなりと云ふ、又開平炭鐵の如き、大仕掛にして而かも巨利の伴ふものも、亦李が誘導に成れる、清國近時の大事業なりとす、其の他許多の銀行錢莊等、少しく頭角の嶄然たるものは李の資

本を給せざるもの少しと云ふ、見るべし李が經世の才を、獨り政治部面に局促せずして、施すとして殆んど宜しからざるものなさを、今左に長江沿岸視察中なる某氏が最近の書信の一節を摘載して之を證す、

長江一帶は不肖同行することにして決し、蘇抗洲より運河を経て、上遊宜昌に到り、沿岸有力の銀行業者、若くは錢業組合等を歴訪したるに、最とも驚くべきは、李鴻章の經營的手腕なり、招商局、開平炭鐵、中國通商銀行等を創立し、自ら之が大株主たるの關係を有し、自家の股肱を以て、之が總辨たらしめたる事實は、既に中外の認識する所なるが、此の外到る處の銀行、若くは質屋にて有力なる者は、多くは李鴻章との關係を有せざる者なく、南京の如きは、商業上の最要地に非ざるも、李鴻章の投資に依て成立せる質屋は六七個所あり、孰も二三十萬乃至四五十萬兩の資本にして、盛大に營業しつゝあり、例へば同地の寶善源といへる銀行は、李鴻章の銀行と稱せらるゝ者なるが、資本は僅に二十萬兩なれども、

李の信用に依りて、一年の取扱ひ高四千萬兩餘に達すといふ、其他蕪湖にも李鴻章が創立せる銀行あり、孰れも親戚若くは親近の名義を以て營業し居れりと云々李の富有なる實に驚くべきにあらずや、其の五十年間、赫々顯要の地を占め、四百餘洲の泰斗たりし所以のもの、固より辣手敏腕の致す所なるべけれども、一つには富有無比の實力を以て、愈々益々立脚を安全鞏固ならしめたるの趣きなしとせず、吾人は現に我が帝國內に於てすら、眼前此の種の人物を目撃し得るなり、況んや錢神崇拜の豚尾邦に於ておや、官に居て財を造り、財多きが故に官を安んず、因果相關の奇なる老耄支那の如きにあらずんば、亦見るべからざるの現象なる哉、

李少筌半生の歴史、凡て失敗を以て充さるは既に述べる所の如し、唯其の貨殖の一點に至りては、正に十二分の成功を告げたりと謂ふべし、此れに由て之を觀れば、李は政治家にあらずして、寧ろ貨殖傳中の人なるが如し阿々

第十 蓋棺後の評論

良價は死後に定まる、曾國藩を相述せるは、のたる所也、

初親露政策、東京新聞の評論

李鴻章は遂に逝けり、一代の風雲兒も、無常の猛火を如何ともする能はざりしなり、顧みれば一生の経行、得失功過相半し、未だ容易に其の眞價を定め得べからず、是非の評、紛々たるもの亦已むなきの次第なりとす、然れども李が死を以て、清國宗社の爲めに悲しむべしとするは萬人一口に出るが如し、或は以て清國の長城を壞るの歎を漏らすものあるに至る、老衰垂死の邦に在りて、老衰垂死の身を捧げ、隠然として敵國に重きを爲したるや見るべきのみ、

余獨り悲む、渠れ犖然の身を提げて滿清の朝に立ち、漢滿種族を異にするの故を以て、絶えず朋黨排擠の妨害に遇ひ、胸中千百の經綸、其の十の一を實行するを得ず、而して外には列強の虎視眈眈として、隙と窺ひ間に乘じ、百般の口實を設け、日々に強壓を試みるあり、李たるもの事を爲す亦難からずや、而も宗社の運命を千鈞一髮

の間に驚き、以て今日に至れるもの、精力絶倫、忍耐衆に超るものあるにあらずんば安くんぞ措置塩梅其の宜しきを得べけんや、今や天亦滿清の命を護せず、國君蒙座の中に於て、社稷柱石の臣を奪ふ、志ある者愛親覺羅氏の前途に向つて、一滴の血涙を贖して可なり、

近時清國の人物を筭ふれば、誰しも指を李張劉の三老に屈す、一は北方に居て、禦侮折衝の任に當り、二は南方の重鎮として、共に中流の砥柱たり、李死して鼎の一足既に折る、若し夫れ後任其の人を得る能はずんば、公の餽の覆へざるもの其れ幾何ぞ、聞く王文韶外交の任を継ぎ、袁世凱直隸總督を署理すと、王は誠懇、袁は精悍、今に及んで人を選択する、或は此の二人の外に出づべからざるが如しと雖も、而も其の名望能く中外の望を繋ぎ、辣手を揮つて列國の間に周旋するの伎倆に至りては、未だ少筮の門牆を望むべからざるに似たり、聞く説く三たび肱を折らざれば、良醫を知らず、盤根錯節に遇はざれば、器の利鈍を別つべからずと、今や正に清國第

二流の人材を試験し得るの時機に達しぬ、具眼の士、目を爾後の施設に留め、仔細に計較商量するあらば、李の潜熱葆光は初めて外間に發揮し、人をして容易に其の眞價を認めしむるに至るべきなり、區々たる門外の下馬評何の増損する所あらんや。人或は李の施設、多くは曾國藩の創建に基くを見て、其の識見の跳不出を卑しとするものあり、余も亦強て之を否とするものにあらず、蓋し曾文正は絶代の偉人、之を彼の土の古人に求むるに、正に諸葛武侯と相當るに足る、之を不世出と稱するは、人豪の常に比肩接踵して出るなきが爲めのみ、見すや那翁死して後、又那翁のあるなし、李を以て曾に比するは適々倫を失せるを知る、且夫れ國藩髮匪を討平し、狂瀾を將に類れんとするに廻らし、滿清中興の大勳を建つ、其の計劃する所、固より大なるものあるべき筈なり、唯だ其れ大なり、故に遺緒を承繼し、其の後を完うするは亦常人の能く勝る所にあらずとす、李鴻章が曾國藩の遺業を紹述せるもの、即ち李の李たる所以にあらざるなきか、昔者孔子文教を布き、堯舜を祖述し、文武に憲章すと云へり、

大聖すら猶且則りを取る所あり、況んや李某なるものに於ておや。
 李鴻章に最も病む所のものは、晩年親露主義を執りしといふに在り、本邦人の立言
 としては必定然らざるべからざるものありと雖も、余は今一應、評者の公平なる省察
 を要求せざる能はず、何となれば既に人物を評すといふ以上は、少くとも一度は身を
 其の人の地位に置き、以て四邊の状況を考査せざるべからず、然らずんば思索時に
 感情の爲めに驅られ、判断の正鵠を失するに至るべきを以てなり、
 蓋し清國は所謂る貽の驢たりしなり、而して其の本來の面目を滿天下に曝露するに
 至りたるは、實に日清戦役なりき、然れども李鴻章のみは其の以前に於ても、孤獨の
 支那を以て列強と抗衡すべしと妄信する程の呆漢にはあらずし、之が爲めに渠れ其
 の積年の怨を捨て、英國と相結び、以て重きを世界に爲んと圖れり、英國も亦商業の
 大得意たるの故を以て、表面には勉めて支那を款遇したりと雖も、元來英國の外交政
 策なるものは、左程頼もしき俠氣あるものにあらず、李は日清戦役に於て自己の目

算の全く畫餅に屬せるを十分に知得したり、加ふるに國勢の陵夷益々甚だしく、四百
 餘州を擧げ列強俎上の肉たるの觀あり、是に於て平季たるもの戦争の敗局を收集する
 と共に、一箇強大の友邦を求め、引て以て後援と爲し、且これに因て外交上の懸引
 を爲し、擒縱靈活の手腕を揮ひ、宗社の命運を永うするなかるべからず、此の時に
 當り露獨佛の三國同盟は正に最高潮に在り、勝ち誇つたる日本は脆くも遼東の無條件
 還附を諾したるのみならず、又朝鮮半島よりも尻込せんとするの陋態あり、英國は固
 より利己の打算に抜目なしと雖も、去りて日本と連衡して露國の南下を防遏する程
 の決心あるにあらず、詮する所は彼れ一を取れば此れも亦一を取り、彼れ二を取れば
 此れも亦二を取るの算段に出で、己れ勞せずして他の接伴馳走に腹ふくらさんするの
 狀あり、是れ最も頼もしからざるの態度にして、假令全心を傾けて之と相結ぶも、所
 謂る鮑の貝の片思ひに過ぐる能はず、之に因て列強の貪嗜を遁れんとするは殆んど狼
 群に投じて身を完うせんとするに均しきものあるなり、然らば則ち日本に求めんか、

此の新興の島國、時に生意氣なる行動なきにあらずと雖も、要するに内訌を見れば淫
 齒なるを免るゝ能はず、以て列強の強壓を捍ぐに足らざるは勿論なり、是に於て平李
 の政策は決しぬ、則ち三國干渉の盟主たる露國に厚くし、以て日英を箝制するに在り
 也。

李の意に蓋し謂へらく、清露の厚情は因て獨佛の覬覦を絶つ所以なるのみならず、
 東洋に於ける英國の力を孤にし、豫じめ許多の欲望を拒ぐに足るべし、況んや日本の
 勢燭を殺ぐに於ておや、而して露國の饜饉 なき、李と雖も之を識らざるにあらず、
 知て而して之と結ぶは、羸羊の資を以て、求めて虎穴に寄るが如し、幾くか其の晚餐
 の膏味たらざらんや、李其れ如何か之を付度せるや、

朝鮮半島は日露の角逐地にして、露國如何に梟鷲なりとも、日本を度外に置いて、
 恣睢放肆なる能はざるは明かなり、而も朝鮮の折れて日本に入るは、露西亞の東方根
 據地を危くする所以にして、露國たるもの決して黙々看過する能はず、之に反して露

國若し朝鮮を掩有せば、日本の危害更に甚だしく、殆んど鼻頭に火を點するよりも急
 なるものあるべし、日本たるもの死力を盡して抗争せざるべからざるは固より論なき
 なり、去れば將來に於ける朝鮮は永く日露兩雄の爭鬪場として、一進一退、一虛一盈、
 相互の力の其の半は、半島の角逐に消磨せらるべく、露は大國なりと雖も勢分るゝ所
 支那の北邊に向つて咄嗟驀進、其の貪殘の慾を縱まゝにする能はざるは、頗る明白な
 る形勢なれば、清國は之に因て以て小康を博し得るの望みなきにしもあらず、是れ則
 ち戰國策士が所謂る遠交近敵の謀、宋末外交家が金に絶て元に結び、以て數十年の
 安きを得たるの遺器にして、李は此の小康の間に於て、更に銳意内部を整理し、全力
 を注ぎて軍政を張り、既墜の國威を桑榆に回らさんと期せるもの、如し、獨の微侯と
 の談緒を見るも、髣髴として其の胸裡を揣摩するに難からざるなり、
 日露鵜蚌の争ひのみを以て清國の小康を圖るの、甚だ索莫として物足らざるは、必
 ずしも智者を俟つに及ばず、李鴻章の爛眼は決して英國の大勢力を輕く看過するもの

にあらず、英國の外交政策は近時漸く他動的に陥れる傾向なきにしもあらずと雖も、彼れが一旦獲得したる利益線を保護するに熾盛なる、亦他國民の企て及ばざる所なり、彼れは露國が飽まで立ち入りて、支那を掻き廻すを好まざるは勿論なれば、愈々自國の利益を護持するに於て、餘儀なきの場合に達つせば、忽然として日英同盟を形造り以て彼の三國の勢力に敵抗するなしとも限られず、是れ露國が最も恐るゝ所にして、道がに傍若無人の舉動を爲し能はざるは職として之に由るなり、龍虎牽掣、是れ豈に李が胸中に描ける想像にあらざるなきを得んや、

更に一步を進めて李が胸裡の秘を考察するに、渠れが飽まで實益を尊び、必中しも虚名に戀々たらざるは、支那政治家中一種特異の點にして、之を其の短處なりといはば云へ、漫に己の力を揣らず、汲々として告朔の餼羊を存せんとするの徒に比すれば、亦見地一等を抜くと謂はざるべからず、例へば豪家の覆滅に瀕するが如し、虚榮に醉へる主人は飽くまでも自家の舊格を維持し、親族故舊の往來より、出入奉公人に

對するまで、從來の虚榮虚儀を釐革するの斷なく、爲めに一層破滅を速やかならしむるものなきにあらず、此の時に方り一個忠實の主管あり、主人を諫止して家計を節縮し、有ゆる方面に向つて事業の緊縮を加へ、無用の土地、利益なきの製造場を人手に渡し、茲に家政の根本的大刷新を施さむ、假令舊時の盛榮に返る遠しとするも、亦以て眼前の覆没を免かるべし、李の政策たる或は之に近きものあるなり。

李は漢人なり、漢土の時代には、王者夷狄を治めずといふの格言を知れり、而も目のあたり滿清の疆土、餘りに尤大に過ぎ、紀綱一たび頽廢してより以來、支離滅裂、殆んど統一し整頓するの難きを視たり、是に於て渠れは全力を支那本土の統治に注ぎ暫く關外曠荒の土は、所謂不治の治を施さんとするに意ありしもの、如し、是れ露西亞の北邊經畧を見ること、英國長江沿岸の垂涎を防扞するに比して、介意の重からざる觀ある所以ならずとせず、且夫れ長江沿岸は清國財賦の泉源にして、一國の生命之に繋る、異時嘗て遷都の議を建てしものあるも亦これが爲めなり、滿清現時の

状態によれば、滿洲の奉天、假令祖宗發祥の地なりとするも、之を失ふは江左一坏の土を盜まるとよりも苦痛を感ずること少し、諺に脊に腹は代られぬとは是れなり、李が英國をそでにして露國に親交を容れたるは、亦解し得べからざるもの無きに似たり。

之を要するに政治家の合縦連横は、時の宜しきに從ひ、彼れを利とすれば彼れに就き、此れを利とすれば此れに就き、固より膠柱守株の愚を學ばず、古人言へるあり、彼れも一時なり、此れも一時なりと、李鴻章が英を疎んじて露に親しむ、豈に以て異とするに足らんや、況んや親露といひ、親英と云ふ、其の關係名辭を異にする程、利害を大局上に異にするものなきに於ておや。

若し夫れ李鴻章が我が日本を輕侮するの極、甲午の大失敗を取りたるのみならず、其の以後に至りても猶我れを縱横の圈外に置くの觀あるに至りては、獨り渠れが知見淺慮にのみ歸するを得べからず、我れ亦此の侮りを招くの罪なしとせず、滄浪の水、

濁らば以て我が足を濯ふべく、滄浪の水、清まば以て我が纒を濯ふべし、局に當る者、猛省一番、支那政治家の注意を惹き起すなくんば、徒らに保全分割の空論に嗽々たるも、遂に東亞の大勢に益なからんのみ。

余は既に李の經歷の梗概を叙し、之に附する一二の愚評を以てしたり、而かも井蛙管見、適々以て笑を貽すに足るべきは深く慙愧する所なり、思ふに李が蓋棺後の評論滿天下必ず少きにあらず、余が淺陋なる未だ之を見るに及ばざるは憾み殊に多しと爲す、唯だ目の觸る、所、都門四五の新聞に就き、其の評論の如何を讀者に介し、以て李が眞價を定むるの資料に供せんと欲し、敢て一字を増損せず、皆其の全文を掲ぐ、(但し各新聞評は李が訃報の至るの翌日即ち十一月九日の掲載に係る)

李鴻章死矣 (日本新聞)

國主久しく陳邑に逃かれて外兵猶は京畿に在り北清の和平僅に成りたりと雖ども而かも東瀛の恢復未だ遂げざるなり、支那今日の國歩亦七難を極むと謂ふべし、此の時

於て元老李鴻章死す、支那對外の事局其れ誰れか之を收むべき李鴻章字少荃道光二年（文政五年）を以て安徽省の合肥に生る、當時歐州の大勢を見るに希世の英雄ナボレヲ第一世已に絶島センデレーヌに於て死し、列國皆な隣境の安を得て以て遠征を企つ而して東洋漸く多事なるに至らんとす露人の我が蝦夷を侵したる、英船の我が浦賀に來りたる、支那の北疆に伊犁問題の起らんとする、其の南邊に阿片事件の始まらんとする、皆な李鴻章の生れたる時に在り。

當時北京廷の君臣外寇を防ぐの念猶は旺盛、伊犁將軍某露兵を畏れて進まざりしかば乃ち勅して之れに死を賜ふが如きあり。自尊自大毫も西洋の事情に通せずして、妄りに之を夷狄視したるの迂愚、則ち之ありといふと雖ども、國是已に此に在り廷臣皆な相ひ奮ふ。林則徐の阿片を燒棄したるより、以て曾紀澤の伊犁を恢復したる迄、當時清廷外侮を禦ぐの意氣甚た壯なりしを見る、李此の間にいで、左宗棠及び曾國藩の諸豪と相ひ駢馳し、廣東の敗に香港を英に失ひ、天津の敗に滿州北部を露に與へ、而し

て其の後ち又た厦門の敗に安南を佛に奪はるゝを見漸く西洋列國の侮り難きを悟りけん。當時李鴻章の奏議は新疆の事に付き、

「新疆各域は乾隆年間より始めて版圖に歸す開闢の難は論ずる無きも即ち無事の時は歳に兵費を需むる尙は二百餘萬兩徒に數千里の曠地を收め 而して千百年の漏厄を増す己に値せずと爲す……西域師老ひ財匱し尤も慮るべきは別に他變を生せんことを曾國藩前きに暫く關外を棄て、専ら關内を清めんとの議あり殆ど老成謀國の見なり況んや新疆は肢體の元氣に於て傷なきをや」

の言あり、亦た以て李鴻章の所謂老成謀國の見を推すに足るものあらん。是より先き、夫の阿片事件に尋いて髮賊の亂あり、江左財賦の重地は賊の占據する所と爲ると殆ど十年、李鴻章、左曾二人と協力して總に平定の功を奏したるも、餘弊の國財に及ぶもの蓋し最も甚しかりけん。李か内治全局の統整を急として關外曠地の保持を必とせざるの主義は其の由來や久し馬關條約に遼東の割讓を拒まざりしも、膠州灣を獨

に貸し及び旅順大連を露に貸すことを容まざりしも、皆な其の從來の主義に出づ、何を獨り滿洲全土の讓與を嫌はんや。

李鴻章が東洋唯一の政治家と稱せらるゝ所以は五十年の活歴史中に在りて能く自國の弱點と歐米諸邦の實勢を知り、平和と退讓を以て歐洲諸邦に交り徐ろに國の統整を圖らんとせしに在り不幸にも彼れは東亞の隣邦に對し誤りて遠交近攻の策を講じ甲午の失敗を取りたるは、其の東洋唯一の政治家たるの榮譽を晩年に失ひし所以なり。李鴻章は此の晩年の失敗を回復せんと擬して早くも一策を得、即ち露國に倚賴して北顧の患を除くと同時に日本來寇の途を杜絶して其の大國の面目を保たんとするの策、是れ戰敗後李鴻章の發見せし所たり。カンシー條約の如きは其の第一着手にして、旅順大連の永貸は之に次ぎ、遂に今春の密約及び今回の協商を以つて其の策を終了せんと欲す。今や不幸にして中途に死す、世上亦此の老政治家の爲めに一滴の涙を落す者あらん。

支那の前途を案ずるに、李鴻章が久しく抱懐する所の國是「暫棄關外專清關内」てふ方針は、以て長計と爲すべき乎、將に祖宗發祥の地たる滿洲を保持して以て南方割讓の啓端を防ぐべき乎是れ固より重大の問題なり、夫れ長江は清廷財賦の重地なり、李鴻章亦た毎に之を言へり、關外數千里の曠地は暫く之を論外に置かんも、滿洲の割讓は自から江左の割讓をも促がさん、清國の前途其れ何の邊に向ひて財賦の地を求めんとかすべき。劉坤一張之洞の二老は現に南方の重鎮たり、今や李老の死去に際して播遷中の朝廷は何人の献替を聽かんとするや。李の生死は清廷對外の向背之に繋がるもせば、李たる者亦た以て限するに足る。

李老の一世は東洋多事の初期と共に始まりて東洋多事の極度と共に終はり、其の國內理亂の跡に之を見るときは、髮賊亂の前より始まりて而して拳匪亂の後に終はれり。曩に北京に於て其の面貌を見る、老體衰憊坐作亦た自由ならず、而かも軀幹長大眼光炯然、言笑の間猶氣人に迫まる。年已に七十八、猶ほ身を挺して敢て艱難の局に當る

に貸し及び旅順大連を露に貸すことを容まざりしも、皆な其の從來の主義に出づ、何ぞ獨り滿洲全土の讓與を嫌はんや。

李鴻章が東洋唯一の政治家と稱せらるゝ所以は五十年の活歴史中に在りて能く自國の弱點と歐米諸邦の實勢を知り、平和と退讓を以て歐洲諸邦に交り徐ろに國の統整を圖らんとせしに在り不幸にも彼れは東亞の隣邦に對し誤りて遠交近攻の策を講じ甲午の失敗を取りたるは、其の東洋唯一の政治家たるの榮譽を晩年に失ひし所以なり。李鴻章は此の晩年の失敗を回復せんと擬して早くも一策を得、即ち露國に倚賴して北顧の患を除くと同時に日本來寇の途を杜絶して其の大國の面目を保たんとするの策、是れ戰敗後李鴻章の發見せし所たり。カシニ條約の如きは其の第一着手にして、旅順大連の永貸は之に次ぎ、遂に今春の密約及び今回の協商を以つて其の策を終了せんと欲す。今や不幸にして中途に死す、世上亦此の老政治家の爲めに一滴の涙を落す者あらん。

支那の前途を案ずるに、李鴻章が久しく抱懐する所の國是「暫棄關外專清關内」てふ方針は、以て長計と爲すべき乎、將祖宗發祥の地たる滿洲を保持して以て南方割讓の啓端を防ぐべき乎是れ固より重大の問題なり、夫れ長江は清廷財賦の重地なり、李鴻章亦た毎に之を言へり、關外數千里の曠地は暫く之を論外に置かんも、滿洲の割讓は自から江左の割讓をも促がさん、清國の前途其れ何の邊に向ひて財賦の地を求めんとかすべき。劉坤一張之洞の二老は現に南方の重鎮たり、今や李老の死去に際して播遷中の朝廷は何人の献替を聽かんとするや。李の生死は清廷對外の向背之に繫がるもせば、李たる者亦た以て瞑するに足る。

李老の一世は東洋多事の初期と共に始まりて東洋多事の極度と共に終はり、其の國內理亂の跡に之を見るときは、髮賊亂の前より始まりて而して拳匪亂の後に終はれり。曩に北京に於て其の面貌を見る、老體衰憊坐作亦た自由ならず、而かも軀幹長大眼光炯然、言笑の間猶氣人に迫まる。年已に七十八、猶ほ身を挺して敢て艱難の局に當る

を辭せず、亦た東亞の一偉材たるを失はず。今や已に隔世の人と爲る、悲夫。

李伯の死去 (時事新報)

李鴻章伯は一昨日を以て遂に死去したりと云ふ今や清國多難の際に此人を失ふ、誠惜しむべし、李の人物に就ては、世間の毀譽自から一ならざりしかど、儼に一世の人物たるは、滿天下の等しく認むる所なり。抑も李は儒生より出身して兵馬の功を建て遂に直隸總督として外交の衝に當り、凡そ外國に關する重大の交渉事件は、一として其の參畫を待たざるなく、外國人の之を視るや、恰かも清國の外務大臣を以てし、東洋に來遊する外人の如き、假令ひ公事に非ざるも、必ず李の門に足を容れざるなく、李も亦胸襟を披いて務めて外客を款待したるが故に其名聲ますく、外人の間に高く或は世界三傑の一として指を屈するものなるに至れり。蓋し清國の政治家中には李と出身を同らし、文勳武功も略ぼ相匹敵するもの少なからずと雖も、外國の事情に通じ外人と折衝して、難を解き紛を排し、能く難局を收拾するの伎倆に至りては、李を推

して第一と爲さざるを得ず。中央政府の内政に關する機務は固より滿人の全權にして李の如き甚だ無勢力なりしと雖も、外交の一事は之を其の双肩に負擔し、清國が從來幾多の外難に遭ひたるに拘らず、其体面を維持して今日あるを致したるは、實に其力に依るもの多し。只彼の朝鮮の處分に關し、傲慢無禮。漫に隣國の公憤を挑發し、日清戰爭の端を開きて自から大敗を買ひ、其結果、世界列國の侮を招くに至りし其失策は、之を李の責任に歸せざるを得ず、我輩が李の爲めに惜しむ所なれども、然れども戰爭善後の任を他人に委せずして、自から其事に當りたるは能く其責任を知るものと云ふ可し。昨年之亂に聯合軍が匪徒を掃蕩して北京に入るや、太后皇帝大臣僚百官を從へ、遠く西方に蒙塵して全く無政府の有様を呈せり、然るに李は戰亂未だ收まらざる中に、當時の任地たる廣東を出で、上海に來り、窺に内外の意向を窺ひつゝありしが、戰亂の鎮定と同時に直に北京に入りて其間に周旋し、慶親王と共に媾和全權の命を受け、老病の身を以て談判の衝に當り、平和の終局を見るに至りしは、一つには

列國孰れも平和を旨として、其終局の速かなるを望みたるが爲めなりとは云へ、李が此間に處したる苦辛盡力は非常のものにして、若しも他人をして之に當らしめたらんには、内外の間に動もすれば、意志の杆格を免かれずして、双方共に一方ならぬ不便を感じたることならん。此の點より見れば、李が若干月の餘命を存して、媾和談判の終局を速ならしめたるは、東洋の平和の爲めに此上もなき仕合と云はざるを得ず、亦以て其人物の尋常ならざるを知るべし。今や媾和談判は既に終結したれども、兩宮は、尙ほ回鑿の途に在り、露清間に於ける滿州還附の談判は現に交渉中のよしにて、其成行未だ知るべからざるものあり、是の時に際して遽に此の人を喪ふ、當人の遺體は申すまでもなく、清國も之が爲めに損する所頗る大なる可し、我輩の深く惜しむ所なり。李既に死して其後を襲ひ外交の事に當るべき者は何人なる可きやと云ふに、試みに指を屈すれば中央には榮祿、王文韶あり、地方には劉坤一、張之洞、袁世凱等あり孰れも候補者として目せらるゝ所の者なれども、榮は年來の行掛として外交の任に

當るは覺束なかる可し、劉張二人は南方の重鎮にして容易に動く可らず、袁は有爲の材なれども、今や自から勢力を養ふに勉めつゝあるのみならず、其の聲望も李の後繼者として尙ほ未だ十分ならざるものあるに似たり、清廷の内情、外國の關係より見るときは、王文韶が李の後を繼ぐに至る可しとの説或は事實に近きが如くなれども、其の後任者は孰れにしても、李の如き地位信用を内外の間に占むるの一事は、到底望む可らず。左れば李が死去の結果として清廷に於ける外交權力の所在は自から變遷を免かれずして南方の總督の如き、次第に外交上に重きを成し、隨て外國の清廷に對する態度にも、自から變化なきを得ざる可きか、我輩の今より想像する所なれども、是れは今後の實際に注目す可き事實なりとして、我輩は李伯死去の報に接し、清國の爲めに一世の人傑を失ひたるの不幸を悲しむものなり。

李鴻章逝く。(報知新聞)

李鴻章の死は、清國の外交に重大なる影響を及ぼすものなり。其の死後、清國の外交は、如何なるものなるか、我輩は、李鴻章の死を、一昨日北京布胡胡

の私邸に於て逝去したり、氏は團匪事件の善後策を講ずるに於て最も心血を凝ぎ、慶親王と共に清國全權大臣として列國折衝の任に膺り媾和談判より滿州問題の解決まで北京外交の難局は、總て氏が専ら之を擔當して銳意進行したるものなり、其政略方針に付ては我輩悉く氏に同情を表する能はずも雖も、老來氣魄少しも衰へず身を國歩艱難の間に挺して、縦横の措畫を盡くすの概亦多とするに足るものあり、今や北清の時局未だ全く終結するを見るに及ばずして、遂に氏の死するに遇ふ、獨り清國の爲めに不幸なるのみならず、列國も亦必ずや有力なる清國全權を失ひたるを遺憾とせむ、事實を直書すれば氏の晩年に於ける施設は大抵失敗の紀念を留めざるなし、明治廿七八年の敗局は、氏が日本の事情を誤解して妄意妄斷したるに原本し、而して此の敗局の爲めに氏の經營したる海陸戰鬪力は殆ど殲滅せられて容易に回復すべからざる瘡痍を蒙りたり、特に氏が隱に三國同盟を利用したる結果は、反つて三國同盟に利用せられ、爾來清國の外交は益々不利益の位地に立つに至れり、獨逸は南より進で膠州灣

の租借を要求し、露國は北より下りて旅順大連灣の租借を要求し、而して清國は唯だ其の要求に諾意を表するの外、別に何の爲す所あるを見ざりき、是れ必らずしも悉く氏の責任に歸す可からずと雖も、亦氏が遼東還附を以て三國同盟の徳と爲し、主として露國に親むの方針を執りたるに由らずんばならず、團匪事件の善後策に付ても、氏は初めより親露主義を以て北京の外交を運爲したるもの、如し、奉天條約の如き、露清密約の如き、皆氏の親露主義に乗じたる露國の行動より出でたるものなり、幸ひに列國の反對に依て孰れも成立するを得ざりしと雖も、要するに露國の勢力が次第に清國政府を壓迫するに至りしは、氏の政略に遠見を缺きたるが爲めののみ、されど氏の後繼者として果して氏より優りたる識力才氣を有する政治家あるや否や、其の後繼者の人物如何に由て、或は一層清國の萎靡不振を來たさしむるなきを保せざれば、其の後繼者たるべき人物の責任は甚だ重しといふべし。

李伯を惜む (東京日々新聞)

本社北京通信員は一昨日午後李鴻章伯の薨去を報じ來り續て其の筋へも同様の公報ありたるを以て此の悲報は遂に疑ふべからざるの事實たるを知る夫れ清は我至親の國にして李伯は永く國命を體して我と交渉最も勉めたるの人なり我國民たるもの今其訃音に接して誰か惋惜哀悼せざるものあらんや蓋し伯は清國に在ては不出世の人傑たり曾國藩其の權勢を譲りてより以來一身を以て國盡を幹して中外の事に執掌し東洋の形勢日に月に危難に趨く時に當りて氣膽儕輩を壓し機畧縱橫打衝按排克く時局の難を濟ひ大凡清國と列國との間に事ある毎に世間の耳目は一に伯一人の上を集る是を以て他の國民の支那問題を説くもの時に清の帝國と李鴻章伯とを同一視し其の舉措出處皆全世界の外交界を聳動するものありしは又以て偉なりと爲さるべからず且東洋の事端滋を加へ我と朝鮮半島及び支那大陸との間常に大小の事絶えざるや彼我兩國間の關係を處辨するもの我には時に依り事に依りて其の人を同くせざるに拘らず清の爲に事に

當るものは乃ち毎に李伯と其門下生となりしのみならず伯固と其の足清の地を出でざるの人にして獨り明治二十七八年戦役の後を善くするが爲に遙に海を踐で我國に來り下ノ關係を締結するに至る惟ふに是れ伯の其の母國を愛するの念に次では我日本帝國の國土と人物とを親好したるものならざるべからず宜なる哉我童幼婦女も善く伯の名を知り國中知ると知らざるを擧げて皆伯の人と爲りを慕ふや而して今や則ち亡し惜しいかな。
或は李伯の外交政略の或一方に偏して屈服是れ事とするを非難し眼前の功利の爲めに其の國を賣らんとするを咎むるものありと雖も是れ恐くは清國の境遇と列國の情勢とを知るに迂なるの見なり伯善く清の力足らずして列國の頼むべからざるを知り其の最も己に近く且其の力の較り頼むべきものあるを求めて相依倚し之に依りて清の地歩を占め列國を操縦するの資と爲す伯豈或一方に偏倚するの己を累はす所以なるを知らざらんや國運民命の危を見て已むを得ざるに道と求む其の苦衷擧るべしものあるな

り今や此入亡し清國の外交政策上多少の變動を來たすや殆ど疑なきが如し只清は未だ一の同盟國を有せず且歐羅巴諸國中露國が地圖上に於て比隣の國たりと云ふの外は皆天涯萬里風馬牛相及ばざるものなるを以て絶東大陸の上に事あるの時に當つては何人が李伯の後を受けて其の局に當るも歩々皆難ひの情なき能はし故に清の外交家が將來に於て猶は李伯の政策を繼承するを得るや否やは全く疑問に屬するのみならず一たび其の取捨を過らば禍殃立るに至るを思はざるべからず且清國政治家中中外の事情に通じ特に列國の形勢を諳知するの點に於ては世間獨り李伯を推すと雖も伯猶は千慮に一失なしと云ふべからず乃ち伯の明敏聰周を以てして猶は時に我日本帝國の國情國力を誤解し意外の困敗を取ることをなきにあらざるなり之を最近の事實に徴するに明治二十六年の交伯は日本の内政困難何事をも爲すに堪へざるを傳ふるものあるに依て輕信舉措を誤り以て二十七八年戰役を挑發し遂に清帝國無前の失敗を招きたり又今春露清密約の事に當りて初より日本帝國の利害と其の出處とを算せずして交渉を重ね其の事

成らざるに至りて初めて其の違算を發見したるが如きは是れなり伯にして若し大勢に通せんか此の錯誤再びすべからざりしなり而して之のあるもの所謂燈下暗黒の類か然りと雖も吾曹此の際故らに伯生前の錯誤を擧ぐるに忍びざるなり唯々之を言ふ所以のものは即ち伯の後繼者の爲めに些々省る所あらしめ由て以て日清兩國の和親を増進し相互に益々東洋の平和を維持するの道を求めんと欲するに外ならず。

李伯の清國に於ける政治上の功罪相半し爲めに毀譽褒貶の紛々たるもの固より論なし而も其の一片國に殉するの志に至ては終始渝らず國人の批難攻撃をも顧みるに遑あらばして斷々乎として其の所信を貫徹するに努め垂死の床に於て將に瞑目せんとするに際し尙ほ國事を憂ひ後圖を關懷に囑し後進を誘掖推薦す夫れ伯は清廷の元老なり其の識度見聞の稍々狭きに失するの識あるも又以て伯の政治家としても個人としても頗る推重すべきものあるを證するに足る伯の如きは一國の重托に任じて能く其本分責任を知るものと謂つべし。

李鴻章伯の訃聞 (東京朝日新聞)

數旬の前東隣の米國民に向てマツキンレー大統領の兇變を弔したる我が國民は、今又西隣の清國民に向つて李鴻章伯の薨逝を弔せざるを得ざるに至れり。

マツキンレー大統領は年齒尙壯、前途最と有爲の時期に於て、一兇漢の毒手に非命の死を遂ぐ、之を李鴻章伯の老衰頽齡、命數を盡して長逝せるに比し殊に哀むべきが如し。但し、伯は國步艱難宗社傾覆四億萬の蒼生殆んど其の生を聊せざるの時代に處し、病餘の老牀を以て列國の使臣と折衝して、未だ克く回天の功を奏する能はず、深憂大息、心血を傾盡し遂に限りなき懊惱と悲哀とを齎らして逝けり、之れをマツキンレー大統領が國運隆昌、國威赫耀、而して其の施設せる政策の着着成功するを見て大なる光明と安慰とを齎らして、斃れるに比し、其の悲痛更に一層を加ふるなり。天は英雄の末路をして、殊に悲惨落莫たらしむるの意ありとせば、伯が其の中年の多運多福なるに反して、其の末年の悲惨不運なりし一事は、又儘に其の配劑に漏れざるを見

るなり。

李鴻章伯の事業經歷は赫々として世の知る所なり清國近世史の大部分を填充するに足るべき伯が半生の歴史は最も變化に饒み、最も情趣を備へたり一個の直隸總督を以て殆んど中央政府の政柄を左右し、一個の北洋衙門を以て全然清國政府の外務部となし中外交渉の事、一に之を其の掌裡に操縦し、人をして清國政府を語らずして唯一の李鴻章を語らしめたるは、伯が最も全盛得意の時代なり。直隸總督の任内にありて革職留任の處分を蒙り、出使大臣として我が馬關に講和條約を締結し、英國政府の指彈に遭ふて總理衙門行走を免せられ、老餘の身を以て河江監督の爲め、山東に出張し、又出で、粵南の總督となり、遂に再び直隸總督となりたるも、國亡び城破れて又手を下すに由なく、困難なる講和談判に最後の折衝をなしたるは、伯が最も失意不運の時代なり。伯は其の全盛時代に於てはビスマーク公と并稱せられて、東洋の豪傑と尊重せられ、其の失意時代に於ては、賣國の奸臣と視做されて、常に汚辱を蒙れり。而も清

國の朝廷、遂に全く伯を閑地に置く能はず、伯又遂に匪躬の節を致し死に至りて渝らざりしもの亦伯の勢力と面目とを見る可きなり。

伯の逝去が清國に取りて大なる缺陷を生ずるは論勿きのみ、兩宮漸く京に回らんとして、滿洲問題未だ結着せざるの今日、伯に代りて折衝の任に當るべきもの夫れ誰かある。ビスマーク公の逝去は固より獨逸國に大なる缺陷を生ぜり、而も公の逝去は公が退隱の生涯に入りて數年を経過したる後なりき。グラットストン氏の英國に於けるも亦然り。獨り李伯は最も國家多難の時に處し、最も國家喫緊の事務に當れるの中途に於て逝けり、假令伯に代りて其の任を繼の人あるも猶ほ且つ其の不便不利を感すべし。況んや滿廷の臣僚能く伯に代るの人なきに於てをや。一偉人の死去が其の國家に大なる缺陷を興ふるの事實は、特に伯の薨去に於て適切に證明せられたりと謂べし。然れども吾人は清國の爲に此の大なる缺陷を生せるを哀しむと共に特に伯の爲に其の死を哀しむるもの也。夫れ伯が半生の心血は注で直隸省にあり、殊に注で天津にあ

り、伯は直隸總督たりしの日最も長く、直隸總督として施設せる事最も多し。伯は清國開發の容易ならざるを感じ、先づ直隸省を以て一個の文明的國家となし、天津を以て文明的國家の中心點となし、茲に學校を設け、茲に機器局を置き、茲に改良せる軍隊を練り、茲に新式なる砲臺を造り、鑛山を開き鐵道を敷き、凡る歐米百般の文物は先づ模範を此の地に造りて然る後之を全國に普及せんことを欲せしに似たり而して伯の得意全盛の時代は殆んど其の希望を達するに幾庶かりしが如し。奈何せん日清の戰役に蹂躪して、權勢地に落ち、身又直隸總督の印綬を解かれて、半生の經營殆んど水泡に屬せり。豈管に水泡に屬せるのみならんや。其の苦心慘愴して經營したる事業は或は破壊せられ、或は占領せられ、或は取得せられ、其の存するもの既に鮮く、而して其偶々存するものは皆外人の利用する所となる。伯が第二の故郷とも云ふべき天津の地、何の時還附せらるゝや知るべからずして、伯が直隸總督の威權を震へる衙門、尙ほ外人の官衙たり。伯が頃來天津還附の談判に意を致せる洵に故あり。而も遂に其

の期を知る能はずして逝く、伯の心緒夫れ果して如何ぞや。思ふて茲に至る誰か一滴の涙なからんや。

李伯の經歷性情に就ては更に論ずるの機あるべし茲に訃報に接して先づ哀悼の意を叙ぶと云爾。

噫李鴻章 (人民)

時も時、場合も場合、満州條約の成否將に決する所あらんとして忽ち李鴻章伯の訃音に接す、世人の豫じめ待期せざるを得ざりし所なりとは云へ、時局の收拾之が爲に益々難さを加ふべく、而して李其人の爲に計る、未だ必ずしも死處を得たりと云ふべからずして、東洋の老雄末路轉た凄慘たるの状あるは最も悲しむべき事態に屬す、意ふに李鴻章伯一代の功過は遽に今日に於て定め得べき所にはあらざるべし、世界三傑の一人として晩年稍々其聲價を減じたるの傾きなきにあらざりしも、こは只花々しさ所作著るしき成功なかりし結果に外ならずして、清國唯一の老臣として世界に重き

をいせしことは則ち依然たり、是れ其最も及び難き所にして他のビスマルク、グラツドストーンをして李と地を易へて運運否塞の境遇に立たしめば、世上の估價或は一變したるやも知るべからず。

故海舟伯嘗て云へるあり、小國には利口者多く出づ、辨給の才以て百事に應酬するに足る、大國には愚物多し、而も人才にして出づるある必ず夫れ大智者ならんと、李伯の如き則ち是なる莫らんや、彼は小事に局動せず目前の成功、場當りの喝采の如きは彼の曾て顧みざる所にして、成敗功過總て之を混沌の中に藏し、茫洋として摸索し難からしむる所正に其大處を見るにあらずや露國に對する李伯の態度に向つては世上難者多し、今回の満州條約は實に李よりして提起したりとさへ傳へらる、果して然らば是れ彼の眼中必ず見る所あり、彼の衷裏必ず信する所あるが爲なるべし、其自ら起たざるを知りて後事を榮祿、袁世凱に托せりと云ふを以てするに憂心仲々、深く後事に慮る所あるや知るべきのみ、顧ふに彼れ既に衰殘の軀を挺して善後の策に被す、爾

州條約は其終結點として彼の必ず生前に了せんことを欲したるは自然の數なり、其見
る所の誤れると否とは今此に問ふを要せず、功罪必ず自ら當らんとする彼の抱負を諒
するものあらば彼亦恐くは地下に眠せん乎、

李伯を云ふもの必ず、劉張二總督に聯想比較す、而して劉、張二人が非露黨たるを以
ての故に對照の殊に興味あるを喜ぶに似たり、然りと雖も兩者の主張は可否遽に斷ず
べからず、只姑らく其爲人に依りて之を見るに李は流動体ならば劉は結晶体なりと云
ふを得べく、張は則ち粘液体なるべし、李は智を以て勝る、眼光物の兩面を穿ちて十
二分に透得せずんば満足せず、即ち悪く云へば意地悪根性の老爺なり、是れ其四百餘
州山河の産せし偉材として、十九世紀に獨歩する巨人なるに拘はらず、遂に切れもの
の不人望たるを免るゝ能はず、狸爺の稱呼と共に内外の畏憚厭惡する所となりつゝも
遂に彼れに頼らざるを得ざらしむる所以にあらずや、絶大の材、狸爺の面目精神此に
至りて光儀を増すこと幾等、嗚呼彼れ今や亡し禹域落莫誰か能く李伯の後を繼ぐべき、

老雄李鴻章逝 (中央新聞)

劉伯基歌て曰く「人生無百歳、百歳復如何、古來英雄士、各已歸山阿」と、嗚呼人生百
歳無く、死生命あり、亦奈何ともすると能はずと雖ども、東洋現代の老英雄たる中堂
李鴻章氏の死の如き、吾輩安ぞ清國の爲に痛嘆を發せざるを得んや。

李氏は淮勇の將として曾國藩の指揮に屬し長髮賊戡定の功を樹しより以來、直隸總督
として北洋通商大臣、會辦海軍大臣として中央政府の顧問として、文明的事業を興し
陸軍を編制し、北洋艦隊を完備し、大に其勢力を養ひ、日清戦役の結果、俄に聲望を
損じ、一轉して總理衙門大臣と爲り、再轉して兩廣總督と爲り、昨夏北清事變の急な
るや、再び直隸總督に任じ、全權大臣として媾和條約を締結して、以て今日に至るま
で、一進一退有り、毀譽褒貶相半ばすと雖も、而かも隱然として身を以て國家の安危
に任ずるに至ては、未だ嘗て一ならずんばあらず、蓋し而氏の晩年は露國黨として内
外の指彈する所と爲りしと雖ども、清廷に於て重きを持し、少くとも列國に對して威

信を繼ぎ、清國を代表したる者は、他に其人無かりしを思へば、氏も亦天晴れ一代の巨人と謂はざるを得ず。

彼の道光卅年即ち我嘉永三年の交、長髮賊の首領洪秀全が、廣西省潯州府桂平縣金田村より起て十六省を蹂躪し、六百餘城を淪陷し、衆を擁する三百萬、金陵即ち江蘇省江寧府に龍蟠虎踞する十二年の時に際し、各所の要害に駐防將軍の督する滿洲八旗は向ふ處敗る、に反映し、辛うじて左しもの大亂を戡定したるは戈登將軍の兵與りて力ありと雖ども、全く湘勇淮勇の功に歸せざるべからず、而して湘勇は曾門出身の左宗棠に督せられて天山南北路の教匪を戡定し、淮勇は曾門出身の李氏之を督して捻匪を戡定し、其後左氏は湖南派の首領として人望を有し、内閣宰相、兩江總督として南方の重鎮と爲り、李氏と顔顔したりと雖ども、其任に卒し、曾國荃、彭玉麟の諸豪之に代りて湖南派を代表したりと、雖ども、李氏に敵すべくもあらざりき、是時より李氏の勢力重きを内外に加へ、直隸總督を以て北洋通商大臣並に會辦海軍大臣を兼ね、

事實上中央政府の顧問と爲り居る程にて、西太后は申すまでも無く、恭親王の如き醇親王の如き慶親王の如き、滿洲の大中小頭目すらも、國內の人望如何に拘らず、彼を信せざるを得ざる時節と爲りたりき而して李氏は内外の秀才俊髦を網羅して己の股肱幕僚と爲し、鐵道の施設、機器の製造、學校の建設、陸海軍の創立編制等、皆其計畫より出でざる莫く、殊に千八百八十四年光緒十年の清佛戰爭に於て、南清地方は其挫衄を蒙りたるに拘らず、北清一帶無事なりしより其勢力は湖南派を壓するに至りたりき、然るに廿七八年の日清戰爭は其結果彼の恃みて以て爪牙とせし淮軍の精銳、平壤の一撃に殲き、其俗て以て長城とせし北洋水師の勢力、黃海の一戦に挫け、而かも直隸灣の門戸たる旅順口威海衛の堅壘碎けて微塵と爲りしより、李氏は直隸總督の印綬を解かざるを得ざるに至り、戦後全權大臣として敗局の責任を負ひ、一方には外交手腕を揮て我國と交渉し、一方には露佛獨三國同盟の勢を藉て遼東を回復し、其失敗を彌縫したりしと雖ども、其聲望を復するに至らず、引續き露國に對する外交の失敗

よりして兩廣總督に轉じ、北清事局の急を告ぐるに至り、身を挺して其衝に當り、直隸總督に再任し媾和全權として列國使臣に斡旋して媾和の局を全うするに至りたる者は、其威望の素あるに由ると云ふと雖も其手腕力量の群を抜くにあらざるよりは、安んぞ能く此に至るを得んや。

湖廣總督張之洞の如き、兩江總督劉坤一の如き、其眞象國を憂ふるの點に於て、其精廉己を持し讒言忌む無きの點に於て、亦其國內の聲望を收むるの點に於て、李氏よりも一長を有すと雖ども、政治家としての手腕は到底其及ぶ所にあらず、李氏の人となり磊々落落、大言壯語人を欺くの失ありと雖も、政治家として、外交家として其老識慧眼大局に達し、大勢に通ずるに至ては蓋し一人なり、殊に列國外交家と樽俎の間に折衝して、機智權略湧くが如く、雄辯飛談縱橫自在、動もすれば群雄を股掌の間に弄し去るが如き、他の學ぶと能はざる處にして彼が獨擅の長技たり、劉、張二老の如きは、即ち湖南派を代表する位置に立つと雖ども、從來事實上に於て未だ中央政府の顧

問と爲り居る程の信用無かりしも李氏は之に反して假へ國內の不人望彼が如くなりしに係らず始終中央政府の倚る所と爲り、國家大難危急の際に於ては常に其老手腕に依頼せざるを得ざるが如き、劉、張二老と異なる所あるを知るべく、是れ實に李氏が清國第一流の大政治家たる所以也。

顧ふに李氏の晩年露國に親附するの政畧に出でし者は己むを得ざるの情勢ありしと雖ども、要するに彼の滿洲密約に賛成せしが如き李氏晩節の爲に措まざるを得ざりき、然るに其密約問題は清廷異議の爲に未だ調印するに至らずして李氏の逝去を聞くは、清國の爲にも將た又李氏一身の爲に幸なりしなり、但だ、吾輩は李氏が清國の大政治家として國家の爲に盡されたる功勞を偉とし、晩年内外之多難に際し、老軀を提げて死に至るまで其衝に當るを辭せざる意氣に至ては、坐るに古英雄の風あるを思ひ、其長逝を聞き、悵然として筆を投せざるを得ざる也。

李鴻章伯逝く (毎日新聞)

今春一たび誤て訃を傳へられ、其後病軀を勵まして、外交の衝に當り、首尾克く義和團事件を終局したる清國の柱石李鴻章伯は去る七日午前十時半七十九歳の高齡を以て逝去せり、一昨夜外務省に達したる公電は此訃音の最早や疑ひなきを證せり。伯は道光三年二月十六日を以て安徽省合肥縣に生れ、長髮賊の亂に於て始めて世に現はれたるの人なり、此賊亂戡定に依て、其名聲を中外に發揚したる一世の英雄曾國藩の門下に二人の俊才あり、一は左會棠にして他は李鴻章なり、左は國藩の武風を傳へ李は其の文韻を承く、曾氏世を去て後、元勳相次で凋謝し、李鴻章伯は清廷唯一の柱石となれり。

曰く同治十年の日清條約、曰く清秘條約、曰く光緒の初年に於ける清英間の芝罘條約皆李伯が赫々名を成したる所にして、其他内治外交に於ける伯の功業、記して傳ふ可き者少からず。

其の日本と開戦して、連戦連敗の汚辱を取りしは、真に一代の失策なりしと雖も、自

ら馬關に来て平和を克復し、更らに歐米を巡視して、巧みに英露獨佛諸國の外交家を操縦し、銳意専心敗餘の清朝に盡瘁したるは、其志亦欽す可きに非ずや。

敵として彼れを視る其の事に臨んで從容迫らず、身を窮地に置いて、奇策妙謀人意の外に出づるの技倆、真に畏敬すべき者あり同文同種の友國の人として彼れを視る、其の智は能く世界の大勢に通じ、其の徳は能く四億民衆の望を繋ぎ、其の機鋒膽略、敗餘の老大帝國を托するに足る者、彼を措て夫れ誰れぞや。

彼れ今や病軀を力めて義和團事件を終局し之を以て、其の波瀾多き生涯の終焉を告ぐべく、渣然として逝けり、清國の將來夫れ如何ぞや、吾人は切に友邦の不幸を感しませんばあらず。

李鴻章(日本タイムス意譯)

李鴻章は既に逝けり、實に彼れは七十九の高齡に於て北京城下木曜日の朝露と消えたり。

されど此の悲報は吾人に些し驚愕を興へざりき、何となれば數日以前彼れが疾病の風聞が此の地に達するや既に其の重症なるを知られたればなり。併しながら又我國に於ける、彼れが數多の私交上の知友は、悲哀なる驚愕にうたれしや必せり。

過去三十年間、著しく極東の政界を飾れる明星は、彼れが死と共に没せり（彼れが死によりて社會は實に過去三十年間、極東の政界に美觀を添へたる人物を失へり）世論は彼れが經世家、愛國家として討査に紛々たり、殊に彼の不幸なる日清戰爭以來の彼れが外交政界に於て其の甚だしきを見る。

吾人は彼れが不運にも晩年數年間把持したる親露政策は、彼れ自國の不利なるべしと信ずるの一人なり。

此の憑信は彼れが在朝儕輩の多數、及び在野一般人民の爾く思ふ所なり。

彼れ有爲の門下生にして副官たる巡撫袁世凱、上海の盛宣懷が、其の他支那政界新

進氣銳の士に、彼れが老後に及びて見棄られたるは、實に悲しむべき現象なりとす。彼等新進が李氏の外交政策を以て、終に爲すあるに足らずとの意見を以て、彼等の舊知遇に背反せるは、是れ固よりあるべきことなり、然り吾人は現今李氏が廢黜によりて、極東の利益が少しも毀損さるゝ如き、如何なる危険も慥かにこれなきを明言し得るまで、李氏近時の外交策が日清双方の不利益なること、完全に論證し得るものなり。

然れども彼れの死去は深く悲しまざる能はず、而して又近世の大政治家を失ひたることに、同情を表するを禁ずる能はず、支那の改進黨章に向つて、多年の間、卓越せる閱歷を有する彼れが如きは恐らくは現代には見出し能はざるなり。

時勢を察知するの明は、彼れが同僚中、或は彼れに勝れるものあるべし、而も事務に敏捷にして、又大膽不敵なるは、決して他人の企て及ぶ所にあらず、吾人は彼れが重大にして而も大責任を帯び、盤根錯節の事を斷ずるの時に於て實に之を見るを得る

なり、はつきんすうはんかんが 輓近數年間彼れが國利に打撃を加へ、吾人をして深く悲しましめたる、不幸なる政策の斷行に於て、殊に此の性質を知るなり。

逸事 李鴻章 終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '李鴻章' and '定價二十錢']

明治三十一年二月廿五日印刷
明治三十一年二月廿五日發行

李鴻章
定價二十錢

著作者 早田 玄洞

發行者 岩崎 鐵次郎
東京市神田區鍛冶町十七番地

印刷者 長谷川 辰二郎
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所 同志社印刷部
東京市神田區錦町三丁目一番地



發 兌

東京市神田區鍛冶町十七番地

大 學 館

正價廿五錢
郵稅四錢

宮崎來城君著 乞食旅行

寫眞版
數葉入

腹に萬卷の書を貯へな
がら旅行のしたさに
缺碗と片手
に乞食の仲
間入して
と經廻實歴談
くつた實歴談
る三日したら止められ
ぬと乞食の境
いふはそんなもの
遇はでわらうか
來城氏が無錢旅行を讀
んだ人の**趣味**
はそのことを知て居
る多いことぞ有うと
て本館が喋々せざと
も一つ讀んでみたい
うという氣になるであら

著人山葵田生◎序人山漣谷巖

正價廿五錢
郵稅四錢

少年小説 英雄少

寫眞版
數葉入

生田葵山人が**獨特**
少年小説に
麗筆を有する
の**麗筆**は既に
文壇の公評た
り本書は山人が苦心
經營の著作數篇を
蒐録したるものにして篇
中の主人**無邪氣**
公が或は**天真**
てに**勇氣**あるは
に**快活**なる所如何
を心酔せしむるや否や試
に一通し**好伴侶**
てその**好伴侶**
を知り玉へ

東京神田鍛冶町
十七番地
大學館

三〇

大學生館
同志連印
同
早川
...

編九第話叢傑豪

著君城來崎宮

傑豪の情多續

正價廿五錢
郵稅四錢

瑰奇にして而かも優絶な
る筆致に富める宮崎來城
君に多情の豪傑
一篇を出た世の讀
して大に驚かす
書界を驚かすは江
の聲に促かされて更
油れに促かされて更
たる戦國の猛將
勇士が情事を寫
戟と紅粉、甲劍
冑と彩衣、如何に
の人をして恍惚たらし
よ、炯眼と柳眉、
廣額と花顔、如何
に其の光景の人をして
た恍惚たらしむるよ、

著君浪春川押

談奇人怪

正價廿五錢
郵稅四錢

表題に驚倒
す、本書の記事推量する
に足らん、我れか我れに
非す彼か疑團百
彼に非す疑團百
出、煩悶痛苦已にして、
なり、我れ我れなり彼彼
氷融くるの感ありこれ一
他篇の骨子の梗概なり、其
場の花、如何に讀者を
れしむるぞ加して寢食を忘
ふるに著者、圓熟の
筆を以てし、婦女
童幼たれば、其の趣味を解
東京神田鍛冶町
大 學 館

寫眞版
數葉挿入

著君浪滄野矢

客食修行無錢

正價廿錢
郵稅四錢

胸間燦爛たる勳章を掲
げ馳馬に鞭ちて臺閣に
上り幾多英傑
の前身を究むれば
一貧生に過
きざりしなり、奴婢と
居を同うして薪水の勞
せし食客なり、し
唯そ堅忍不拔
勤勉力行よくその成効
を致したる所以なりと
著者か實踐した
す本書實踐した
閱歴を多くし
てす、滑稽あり
腕を扼腕の憤慨あり
腕を扼腕の憤慨あり
腕を扼腕の憤慨あり
腕を扼腕の憤慨あり

著人山葵田生◎序人山漣谷巖

少年進擊隊

正價廿五錢
郵稅四錢

葵山「少英雄」を著
人滿天下の少
年進撃隊を讀む少年
必ず「快哉三呼」でし
や、爲すあらずんば已ま
ざる可し、漸
く舊習の弊、日出
國の少年、意氣注
裏とせしめんとす然れば
則ち本書の功は當に一讀
消閑の具たるに留まらず
また少年教育の一
端を補ふに足るものある
なり
東京神田鍛冶町
大 學 館

豪傑叢談

洋裝本 全 部 拾 貳 冊 正 價 拾 五 錢 郵 稅 四 錢

- 第一編 宮崎來城君著 **多情の豪傑**
- 第二編 宮崎來城君著 **臨終の豪傑**
- 第三編 宮崎來城君著 **少時の豪傑**
- 第四編 岩井松風軒著 **遺訓の豪傑**
- 第五編 宮崎來城君著 **雅量の豪傑**
- 第六編 西山筑波君著 **交際の豪傑**

目次左の如し
 ○源朝○源經○平重衡○木曾義仲○曾我
 ○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴
 田勝家○平維盛○豊臣秀吉
 豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來
 城子獨擅の健筆を振つて無数の古豪傑が臨終
 を描く一讀猶夫も起つ可く鬼神も泣くべし
 蛇は三寸にして人を呑むの慨あり、豪傑の豪
 傑たるはそれ天品に依るが又聞く大器晩成の
 語あり豪傑の豪傑たるはそれ豪傑に依るのこ
 言語窮止に徴せよ
 創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子
 孫の業に在り、遺訓を遵守するものにて榮へ
 有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝夕
 の鑑とすべし
 諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數
 以外に一種の天真瀟灑なる態度を以て人を迎
 へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し
 出されたるもの一讀光風霽月の想あらん
 交際は即ち處世法なり、交際に拙なる者は世に
 運り接す此間に處して如何に談話し如何に持
 過すへきや豪傑の苦心また甚だしきものあり
 此書これを觀いて些の餘蘊を見ず

(五)

著 君 堂 徂 崎 岩

名士の兄弟

正 價 拾 五 錢 郵 稅 四 錢

近 刊

一世に快事多し、然
 腹一生の兄
 弟が共に蘊奥の學殖を
 極めて相競ひ共々赫
 々たる名聲を博して並
 稱せらるるの快事は及
 ぶもの無けし現今社
 會に活動せる活社
 人物の兄弟が逸話傳
 記を描きたるも
 してに立志の興
 奮劑たる事疑ふ可か
 家庭必須の書
 なりといふ可し
 東京神田鍛冶町
 十七番地
 大學館

著 君 山 霧 藤 須

名士の家夫人

正 價 拾 五 錢 郵 稅 四 錢

近 刊

區々たる一婦人、纖弱な
 る女子遂に天下無用の長
 物たる乎、事に表裏あり、
 物に陰、國の盛
 衰、家の興亡
 觀し來れ、巾幗の
 は由來、侮る可からざ
 勢力、るものあり、
 名士の稱名
 家の譽、鳴呼豈亦
 子の功に歸す可けんや暴
 風松柏を倒さんとしてこ
 れを支ふるもの何ぞ松柏
 に其身を託する葛蘿なら
 ずや然、婦人の功
 らば、亦冥々に附す可からざる
 なり

(四)

談叢傑豪

正價一圓 郵費五角 郵稅二角 全 部 拾 二 冊 裝 本 美 洋

- | | | | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 第七編
岩井松風軒著
豪傑の信仰 | 第八編
西山筑濱君著
豪傑の修養 | 第九編
宮崎來城君著
續多情の豪傑 | 第十編
西山筑濱君著
豪傑と奥方 | 第十一編
吉川曾水君著
豪傑の權謀 | 第十二編
西山筑濱君著
豪傑の嗜好 |
|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|

英雄豪傑の壯麗偉蹟は實に堪れが信仰の産物なり、神か、佛か、人の物か、道か、理か物か、語等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成したるものなり本書に之を論ぶ

大事業の下には大なる準備あり偉人の業には大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑のその修養に力むるに困苦勩勵せしむるを見よ

蓋に、多情の豪傑一篇を著して滿天下の耳目を驚倒したる著者更に其洩れたる戰國の勇將猛士が情事に寫す瑰奇怪麗の筆致は眼くを用ゐず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ

豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要す、女子の男子に及ぼす勢力等大なるものあればなり、此書或は叙説し或は評論し後編と住人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり

優勝劣敗は世の常數なり、兵を用うるに正道あり權道あり要は敵に勝たんとするに因す豪傑の士術策を用ひ權謀を行ふ亦已むなきに出づ巧拙得失はその人如何に在るのみ

兵馬倥傯として饑食易からざるが如し、而かも此中優に自適閑日月あり、これ蓋し豪傑の人たる所以なり、陣中夜深くして時を賦、何ぞ風流なるや死眼前に在りて秘愛の當を弄す何ぞ優美なるや

名家文庫

全八部 正一冊 參拾錢 郵費四錢

- | | | | |
|-------------------------|-------------------|-------------------------|-------------------------|
| 第一編
美文
白砂青松
切品 | 第二編
美文
清風明月 | 第三編
美文
巖下滴泉
切品 | 第四編
美文
水村山郭 |
| 第五編
美文
紅葉青山
切品 | 第六編
美文
江山烟雲 | 第七編
美文
閑雲野鶴 | 第八編
美文
雪裡野梅
切品 |

國色史叢

正價各廿錢 郵費各四錢 美版

- | | | |
|----------------------------|----------------------------|-------------------|
| 第一編
宮崎來城君著
美人 | 第二編
宮崎來城君著
西施 | 第三編
巴御前 |
|----------------------------|----------------------------|-------------------|
- 楚の項羽の虞兮の歌を讀んで死別の血涙を流したる虞美人は三尺の童子猶これを知る而も評傳は唯此一書あるのみ
- 國亡びて山河在り英雄の遺恨長へに滅びず楚の山河に在り英雄の遺恨長へに滅びず楚の山河に在り英雄の遺恨長へに滅びず楚の山河に在り英雄の遺恨長へに滅びず
- 我國史上女流の美極めて多し而も美にして怪力あるもの唯巴御前のみ絶倫に傑を描いて匹敵する元より其所

文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著

楊貴妃

第五版 正價廿三錢 郵稅四錢

帝國大學教授內藤耻叟先生序 黑河内與四郎君著

靜御前

第四版 正價參拾錢 郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序 岩井松風軒君著

小野小町

參版 正價廿五錢 郵稅四錢

松村介石君序 光井深君著

學生自活法

再 正價拾五錢 郵版四錢

附錄 東京諸學校案内 同入學試驗問題

文學士梶川島城君序 林稻洲君著

理想の良人

正價十七錢 郵稅二錢

著者夙に漢文學に精通し清國に歴遊して人間未見の書に涉獵すること多年其異奇無雙の筆を以て天下無双の國色を描く材料斬新にして雙麗の逸話蒐録してか美觀に接し媚言を耳にするの感あらん。

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書珍本を材料とし該博なる學識と流麗なる健筆に依りて靜御前が幼時より其最期に至る迄極めて正確に物せられたるもの殊に其後經との關係の如きは最も詳細を極むる坊間散漫社説の詳傳とは同一の談に在らざるなり。

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙してたるもの材料は正しく豊富文章は流麗暢達從來不可思議の種に疑感を留めし小町の事跡は此書に依りて始めて明晰に解決せられたり。

都下何千萬の學生の中能く其素志を貫くもの幾人かある多きは悪魔の爲めに病氣の爲めに中途にして郷里に歸るもの失敗するもの體を接ぐにあらすやこれ其罪たる都下の事情に暗きや故なり獨立歩歩の勇なきや故なり光井君此を憂ひて此書あり出京の學生を導く事親切丁寧遂にこれ學海の羅針盤たりと言ふべし。

笹川隴風君序 田岡嶺雲、宮崎來城君合著

俠文章

正價廿五錢 郵稅四錢

文學士辰己小二郎君序 岩井松風軒君著

遊仙窟評釋

第四版 正價廿五錢 郵稅四錢

以て知る可し、本書は訓讀釋義評釋の三點に分、最も平易の語句を用ひ通俗的に評釋したるものなり。

長恨歌評釋

再 正價十三錢 郵稅二錢

宮崎來城君序 吉田谿南君著

唐代美人傳評釋

正價廿五錢 郵稅四錢

白樂天琵琶行評釋

郵稅四錢

宮崎來城君序 金田雪窓君著

女流の偉人

第四版 正價廿五錢 郵稅四錢

本書集輯せる所一切我邦の國媛才女に係り、毫も異邦の人物を加へず、これ我邦には我邦の奇評あり、特色あり、神體あり、精華ある所以にして或は總行を以て著ばれ、才色を以て勝れる必ずしも一定せず、而して書中時に校書始婦を挿記するは妙裏の黄金泥中の蓮花なきに非ざるを以てなり、苟くも世の婦人良婦賢母となる志あらば必ず一本を備へざる可からず。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編

漢文和文漢譯秘訣

正價十五錢 郵稅貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を擧げて實字、虛字、助字の用法及語句の轉例、漢文一字一字詳説し又譯文の異同を識別し譯文の運用、代名會得せしむる爲同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士 加藤正雄君序 南海道人編 (挿書三十二個)

書法秘訣 習字速成圖解

再正價十五錢 郵稅四錢

本書は永字八法、草字筆法、一文字五形、隸書、楷書、行書、草書、篆書、四修、習字、文學之價、筆勢、筆拍子、去、欣、黑色、生、字、死、字、病、字、等、の秘訣、魏、大、王、羲、之、晉、成、帝、柳、公、權、東、坡、等、の書法秘訣より書體の種類、筆道、の用具に到るまで詳細不備。

涵養社編纂

現代青年の憲法

正價廿錢 郵稅四錢

如何にせば成效すべし乎、滿部幾萬の學生が日夜焦慮する問題に不幸にして往々解決せざるものあるは、何ぞこれ精神を顧みずして形式を學べばなり、本書は此等の弊を痛めて青年の福音たるを得べき乎、十二、大家の青年教育談は本書獨得の記事なり。

涵養社編纂

新式勉學要訣

正價廿五錢 郵稅四錢

學を務むるに法あり法を誤れば貴重なる時間と莫大なる金銀を散じて得る所望のみ本書は此の弊を痛めて、中學生には宜しき勉學の指南書たるを得べし。

巖谷連山人序 生田葵山人著 寫真版挿入

少年進擊隊

正價廿五錢 郵稅四錢

生田葵山人が「少英雄」を讀きたるものは必ずやこの「進擊隊」を讀まざるを得ざるべし、少年の血氣、所長神を注し、山嶽を躍動し、好曲の少年山人の筆に依りて活動し、破天荒の事業を演出せんとす、挿畫鮮麗亦以て机上の珍とするに足る。

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

無錢旅行

正價廿五錢 郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉するに在り、風を響ひ露を飲み、食と合宿するなど、辛苦の中に忘られぬ趣味の存するものあり、此書はに出で、忽ち數千部を賣り盡せり、以て如何に社快なる讀物なるかを知られ。

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

乞食旅行

正價廿五錢 郵稅四錢

腹に萬巻の書を貯へながら旅行のしたるに、映鏡を片手に乞食の仲間入して、彼處此處と経過つた實験、てある、三日したら止められぬといふ乞食の境、はそんなものであらうか、來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を驚るであらう。

矢野瀟浪君著 寫真版挿入

無錢食客

正價廿錢 郵稅四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て讀み、活讀むものにして、食客が辛酸困苦の境、不平憤懣の、近時片々たる小説に比して、趣味を感ずること、多し、のみならず、苦學の書生に慰樂を興ふること、甚だ多し。

巖谷連山人序 生田葵山人著 寫真版數葉挿入

少年少英雄

正價廿五錢 郵稅四錢

生田葵山人が少年小説に獨得の筆を有するは既に文壇の公評たり、此書は山人が田園生活數ヶ月間に於ける苦心經營の作、數篇を蒐めたるものにして、快活なる試、主人公は如何に少年諸君が敬慕する所なるか、試に讀してその好伴侶たるを知り玉へ。

西山筑濱君著

戦國時代 少年武者

正價廿五錢
郵税四錢

少年武者が活動は果して如何筑濱君の筆これを描いて面目躍如せんとす腥風血雨の巻その緋威の雄姿の如何に勇ましくよき月光花影の下その小姓姿の如何に愛らしきよ

岩崎徂堂君著

名士の兄弟

正價廿五錢
郵税四錢

世の中に愉快なる事少なかられど其中にも一つ腹のち生れ一つ處で育ち一つ乳房を吸つて一つ學校に通つた兄弟が漸々と成長して共に青雲の地位に昇つた程愉快な事はあるまいこの書は現今有名な人達が大に立志の興奮劑となるてあらふ

須藤彌山君著

名士名家の夫人

正價廿五錢
郵税四錢

古今東西名を擧げ産を興すの人士はそが夫人の内助扶掖に依るもの多し世に名士名家の傳記逸話の行はるゝや久し、獨り夫人に關するもの無かる可けんや本書叙筆平易にして項目頗る多讀んで面白く且つ有益なり

押川春浪君譯著 寫眞版數葉入

怪人奇譚

正價廿五錢
郵税四錢

本書蒐録する所人外狂、奇俠士の二編添うるに戰場の花を以てす、譯者の筆精細にして一度の遊湖を見ず、讀み去り讀み來れば身その中に主人公たるの想あり

平野紫陽君著

文學奇瑞談

正價廿五錢
郵税四錢

天地を動かし、鬼神を泣かしむ和歌の功大なる哉武士夫婦の情を和ぐる俳諧の體傳なる哉和歌俳諧の功徳は更に言はば文章詩歌が神佛を感應する功徳其の中甲ふ可からざるものあり、本書は古來歴史上の奇瑞不思議の逸話を蒐録せるもの消閑の具には無比の好著にして又得易からざる參考書なり

緒方流水水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

正價廿五錢
郵税四錢

新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附するに之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類語を蒐集したるもの、新體詩自修の指南車は本書が精て何れにか之を求めん

石橋玄潮君編

韻花天月地

正價廿五錢
郵税四錢

本書收むる所は當時有名の新體詩人の作にして其萃を抜き其精を選ひて之を集む、其數七十有餘適當に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

美文美辭麗句

再 正價廿錢
郵税四錢

本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)地理、天文、人、品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり蓋し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信ず

國府犀東君序 香川怪庵君述

文士政客風聞錄

正價拾五錢
郵税貳錢

方今其名噴々たる政治家、文豪が奇話珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、珍聞あり、奇談あり、風流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す

早田玄洞君著

膽力の養成

正價廿五錢
郵税四錢

膽力の養成は智力學力の養成と相待つて始め事なす可し而かも膽力の養成にして不充分ならんには智力學力殆んど其用をなさじ學に志し業を成すの人士須らく本書に就て膽力養成の秘訣を解せよ

早田玄洞君著

膽力の養成

正價廿五錢
郵税四錢

智力凡人に秀で學力一世を蓋ふと雖も若

し**膽力**にして**缺如**せん乎

九仞の功を一簣に缺くの恨なくんばあら

ず、殊に方今の時弊は堂々たる男子徒ら

に婦女の態を學び**文弱の流俗**

日に甚だしからんとするに當り本書は寔

にこれを警ふれば起死回生の良劑なり情

眠を覺醒する**爆裂彈**たり

宮崎來城君著

名流叢談

第一編 **苦學談**

正價十錢
郵税四錢

苦學十年始めて一家を成す可し

古人今人世に名聲を博し天下に榮譽を得

るもの孰れか苦學の結果ならざらんや

來城氏が**健筆富想**天下悉く敬服

する所本書は實に氏が苦心の餘に成り

たるもの**天下青年**を益する事計

る可からざらんや

おつかさん面白い本が出ましたよ

一部七錢 郵税一冊二錢
六部前金卅九錢
十二部前金七十二錢

第一編 宮本武藏(近刊)

巖谷連山人序

黒田湖山人編

日本**武將お伽噺**

小島冲舟密畫

色刷菊版美本

第二編 岩見重太郎

第三編 荒木又右衛門

第四編 佐野鹿十郎

第五編 塙團右衛門

第六編 山中鹿之助

東京神田
區鍛冶町 大學館發行

○強いもの、衰いものにならんとする兒童の爲めにとて、幼年文學に精通の聞えある著者が、今回其の實傳に依り平易にして、面白く、勇ましくして下品ならざる筆を以て新に書き起されたるものなり。

○毎卷冲舟畫伯の精巧なる密畫を挿入し、特に色ずりの美麗なる挿畫を添へ、偏に兒童の目に興多からん事を力めれば、兒童の爲めには、よき讀物の外、また能き見ものなるべし。

○此の書一度市に出でんには、おちや屋が非常なる恐慌を起すべきを信じて疑はず、おちやよりも此書を欲しがらるもの、定めて多きを信ずればなり、希くは愛玩をたまへ。

おつかさん早く買つて頂戴な

今世少年

東洋少年雑誌の「霸王」今世少年は今回、斬新なる趣向の上、記事も大刷新を施し、本館に發賣する事とせ、其材料の豊富、其の完備、一千五百年來最傑出の物たるは、天下の公論なり、買後悔し給ふな!!!

要目

- お伽譚 名家談片
- 英雄の傳記 珍事珍聞
- 冒險談 弟妹領分
- 新體詩 遊戯
- 内外旅行記 諸國奇談
- 當代立志談 一口英語

毎月一回五日發行、一冊十錢、六冊五拾七錢、十二冊一圓八錢、外に郵税一冊に付壹錢づつ、郵券代用は凡て一割増(壹錢切手に限る)爲替拂込は「神田多町局」爲替受取人は「東京府神田區鍛冶町十七番地 大學館」

此外、從來の如く、陸海軍の談話を掲げ、青年詞藻欄に光輝を放たせ、お笑草欄に入す、智慧もえ、荷らず、臍すは衛生の爲、買ふべし〜!!!

發行所 東京市神田區鍛冶町七十番地 大學館

正價 廿五錢

世界奇怪譚

郵税 金四錢

押川春浪君著 岡落葉君密書 第一編 奇人の旅行

奇人の旅行は世界奇怪譚の第一編として顯る、夫れ旅行の趣味は千變萬化にあり之に配するに奇人を以てす以て如何に本書が意表に出づる記事を以て満たされたるかを知れ、本書一度世に出だされたらんには彼の一九の膝栗毛は最早本箱の隅に押し込めらるゝ可し

早田玄洞君著 寫眞版挿入

李鴻章

正價廿五錢 郵税四錢

東洋の風雲は多くこの一巨人の手に依りて、變幻出沒するの感あり、虞翁、比公と相併んで三大英傑の名を得たる偶然ならず、今や彼れ溘然として遠逝す、これを傳しこれを評しこれが逸話を蒐めこれが行動を叙しこれと奇聞を記しこれが性格を活描する者 天下僅に此一書あるのみ

英語獨習雜誌 實用英語 每月一回發行 六十號迄既刊

●第壹號掲載目次七版
 ◎實用英語 (畫肆に於て○時に就て)
 ◎和文英譯 (イーストレーキ氏)
 ◎康樂毛織 (大野兵衛北八人骨を食ふ)
 ◎節用文譯 (維句註釋) ◎英文典
 ◎英文和譯 (書簡文種類) ◎書簡文選
 ◎書簡文練習 (書簡文種類) ◎書簡文選
 ◎め方 (骨類及結尾禮儀上の詳) ◎料理
 ◎及英折方
 ◎類語異同辨 (慣用語句集)
 ◎試驗問題答案 (海軍兵學校) ◎第一高等
 ◎學校英語答案 (イーストレーキ氏)
 ◎類語異同辨 (イーストレーキ氏)
 ◎入品詞用法 (イーストレーキ氏)
 ◎用法 (白粉車の滑稽傳説の西洋いろは)
 ◎○警西洋の厄年 ○奈翁の一生運な
 ◎○書 (英文成詞 (外字新聞) 絶者
 ◎○七〇〇英文成詞 (文學士久保清彦
 ◎○英語に於ける舌の地位 (法學士加藤正雄)
 ◎○譯解法指南 (在帝國大學未得功)
 ◎○大家英語 (神田乃武氏の譯讀及發音)
 ◎○英語總論 (英語大意英字の種類) ◎英語研究の順序
 ◎○發音法 (母音字の發音詳解) ◎英語の片假名 (スハルソク)

●第貳號掲載目次六版
 ◎新學會話 (イーストレーキ氏)
 ◎アラドベリ博士の會話教授法
 ◎和文英譯 (岩倉具視洋行中の失敗)
 ◎黒田清隆の通譯 (勝海舟八巻の洋書を手寫す) (イーストレーキ氏)
 ◎和文英譯練習 (實用和文英譯の順序)
 ◎方法及譯文の當否を説明す (ジャバ
 ◎Roughan J. J. Mooney の父に
 ◎興へて政治に志す者の素養を論ずる
 ◎の書 (河津清)
 ◎新案の英文法講義 (法學士愛堂生)
 ◎試驗問題答案 (東京商船學校) ◎高等
 ◎師範學校本科英語答案 (イースト
 ◎レキ)
 ◎譯法と英語研究者 (法學士加藤正雄)
 ◎Alphabet に就て (法學士小合伸)
 ◎譯法指南南稿 (中學用和文英譯 (本山和雄))
 ◎東京府尋常中學校の英語新式譯法一
 ◎標準 (君が代の英譯) ◎新年賀狀體形

●第三號掲載目次四版
 ◎實用會話 (天氣に就て) (イースト
 ◎レーキ)
 ◎和文英譯 (薩侯の秘寶前島密を盗
 ◎す) ◎桐野利秋會津の小織と文を結ぶ
 ◎一鳥尾小彌太哲學者を捕る ◎遊澤榮
 ◎一洋服の古着を買ふ (イースト
 ◎レーキ)
 ◎第五高等學校 ○海軍機關學校試驗問
 ◎題答案 (イーストレーキ氏) ◎書出し及
 ◎受取取附形
 ◎其他第一號諸編、第二號新設諸編の
 ◎材料豐富、逐號進歩の域に向ふ

●取揃有之候
 ◎本誌實切に相成候へば直に増版致し第
 ◎一冊より毎號取揃可申候に付各賣
 ◎所に於て品切の節は本誌に記載する定
 ◎候へば直に發送可仕候
 ◎一冊九錢 二冊一六錢 三冊二二錢
 ◎一冊九錢 二冊一六錢 三冊二二錢
 ◎一冊九錢 二冊一六錢 三冊二二錢
 ◎一冊九錢 二冊一六錢 三冊二二錢
 ◎一冊九錢 二冊一六錢 三冊二二錢

長田偶得君著 岡落葉君密書 逸事 明治六十大臣

正價金三十錢 郵稅四錢

明治十八年内閣の改革以來大臣の職にあつた人々は**總計六十人**である著者例の健事を振つて六十人が**大禮服**を抜き去つた**眞裸**其儘の所を描く一讀噴飯**捧腹**絶倒

岩崎徂堂君著 岡落葉君密書

中江兆民奇行譚

肖像筆蹟挿入 正價廿五錢 郵稅四錢

兆民居士は**一世の奇才**なり、奇言人を驚かし、奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如し、嗚呼恁の奇男兒**不治の病**に罹つて病褥に在り、今にして渠れが**奇言奇行**を蒐め以てこれを剞劂に附するは聊か著者の感ずる所あればなり

涵養社編纂

現代**青年の憲法**

正價廿錢
郵税四錢

如何に**成效す可き乎** これ幾萬の青年が日夜焦慮する問題なりとすこれ秘訣を知らんと務めて空漠攫む所なく半途學を廢するの悲運に了るは何ぞやこれを要す**精神**を措**形式**を學べるに彼等は**精神**を措**形式**を學べるに**此等の弊を拯**て**青年**の**福音**たるを得可き乎輯むる所嘉納治五郎、杉浦重剛、大槻文彦、島田三郎、横井時雄、三宅雪嶺、井上哲次郎、大隈重信、志賀重昂、加藤弘之、**青年教育**の熱心なる人々實、**青年教育**の談叢なり

涵養社編纂

中**新式勉學要訣**

正價廿五錢 郵税四錢

本書は勉學の要訣を叙述するに極めて**新式**を取り中學生が**参考書**たるを期したり、理科、外國語、數學、國語、作文、歴史、地理、漢文等總て普通學の**最要科目**に就てこの研究方法を**叮嚀親切**の筆を以て書きたるもの執筆者は**博士學士等皆**方今有名の大學者なり

木村鷹太郎君著

バイロン**文界之大魔王**

バイロンが狂熱炎々たる文學、廻鑿蕭殺たる行動は以て**文界之大魔王**の名ある所以而かも此れを傳へ此れを論じよく遺憾なきものバイロンに劣らざるの**情と思想**を具備せざる可らず鷹太郎君は其名**文界に嘖々**たるの士恐らくは人を得たりと言ふ可し、

與謝野鐵幹君著

新派和歌の栞

鐵幹君が新派和歌の道に忠實にして**多**年一日の如くなるは何人も異議なき所本書は鐵幹君が懇切なる歌話**精細なる註釋**真面目なる評論凡て**和歌に關して一切**を蒐めたるもの、以て和歌を研究せんとするの士には**無比の良著**たりと言ふ可し、

駿臺隱士著

學生坐右叢書第一編

最近記憶術

正價廿錢 郵税四錢

記憶術に關しては從來著述尠くはないが概して理屈一方に走つた乾燥文字で讀者は五里霧中に彷徨うて一句要領を得ない状態であるそこで隠士が廣く諸書を參考して苦心の結果實用に適した最近の方式に依て極めて平易な文字で著はされたのが即ち本書である

駿臺隱士著

學生坐右叢書第二編

學生讀書法

正價廿錢 郵税四錢

讀書をするに坊主が經を讀む様では千卷萬卷何の益もない殊に今日の様に著書が數限りがない状態では殊に讀書の法を知らないと時間と費用に計る可ざる損害を蒙るのである依て苟も忠實な考をもつた學生は讀書法を會得して方針を誤らぬ様にせねばならぬ

早田玄洞君著

臨終の一日

近刻

人生の問題、死より大なるはなし、而かも千古茫茫未だ一箇半箇の解決を見ず、嗚呼吾人は如何にして末期の一日を觀すべきぞ、勃萃の理論は吾人の求むる所にあらず、只看よ古來の英雄豪傑哲人高僧美人烈女が死に處するの用意如何玄洞居士靈活の筆を揮ひ寫し來るもの凡そ百則、鬼哭神笑、眞個に是れ近來快心の文字

押川春浪君著 岡落葉君密畫

世界 怪奇譚 任俠 第二編 蠻勇 世界武者修行

正價廿五錢 郵税四錢

奇想天外 より落ちて 快筆 天馬の如きとは春浪漁史の著書を評して最も適切なるを覺ゆ 世界武者修行回を分つ事二十四回冒頭の美人糞浴事件 眞に讀者の膽を奪ふ、主人公團金藤次が如意棒を提げて世界大陸を横行飛躍或は任俠或は蠻勇 碧眼豚尾の膽玉 を挫き日本魂の眞髓を發揮する所 痛快壯絶 蓋し當世寢惚け文士が夢想する能はざる一大雄作なり

3/35

一 冊二拾五錢 郵税四錢
六 冊前金壹圓三拾五錢 郵税二拾四錢

第一編 奇人の旅行(既刊)

押川春浪君著
世界怪奇譚
岡落葉君密書

第二編 世界武者修行(來二月版)

第三編 怪人奇譚(來二月版)

第四編 空中の冒險(來三月版)

東京神田 鍛冶町 大學館發行

第一編出版

押川春浪君著 寫真版數葉入
世界 奇人の旅行
第一編 漫遊
正價二十五錢 郵税四錢

二十世紀の膝栗毛は**世界**の舞臺で御坐る。奇人錢あり其旅費**百二十萬弗**。米國に**鑛山王**を驚かし。太平洋の波上に**鬚露西亞**を回せし花の英國**交際場裡**に、傍若無人の**奇劇**を演ず、美人は馳り、高襟は魂消え、讀者諸君も亦た**一讀三嘆**卷を掩ふこと能はざるべし。

(廿八)

原田東風君著 岡落葉君書

貧民窟

勞働問題 社會問題、風俗問題を研究するの士が第一に知らざる可からざるは**貧民窟**なりとす。

表面は**燦然たる帝都**なり裏面は**雜然たる貧民の巢窟**なり、較ヶ橋、新網萬年町等有名なもの、外散在せる**貧民**少なからずこの**状態生活**を描盡して**些の遺漏**無からんは本書を以て**その第一とす**

近藤嘉二君著

魔術長生法

題目頗る**靈妙不可思議**と言ふ人あらん。然り、何人も**未だ道破**せざる所なればなり而もかの**虚誕無稽**婦女女子の眼を瞞するものに非ず凡て**心理を基礎**として説述著實穩健**功果に顯然**たるものなり試に目次の二三を摘記すれば**長生の秘訣**不老不死**高僧的療病法**等二十餘箇條**人心の靈的作用**長生を冀すの人必讀の書なりとす

(廿九)

宮崎來城君著

鄭成功

正價二十五錢 郵稅 四錢

鄭成功は**國姓爺**の名を以て邦人の間に喧傳せらるる古來稗史演劇に仕組まれたるもの多しと雖ども未だその**完全なる實傳**あるを聞かず。

來城先生夙に**支那臺灣**を跋渉して**斬新の材料**を蓄へらる此に謹嚴にして瑰麗なる筆を以て鄭成功一篇を著はさるを以て邦人が**冒險の氣風殖民の思想**を發揮するに足らん乎

生田葵山人著

貴族の戀

正價三十錢 郵稅四錢

青年作家の間に**天才**を以て目せられたる葵山人苦心慘憺の餘を以て貴族の戀を著はす

構想高遠にして筆跡細微に入り**上流社會の戀愛**を描畫して餘蘊なし、かの狭斜花巷の情事を寫して**小説の能事**終れりとするもの宜しく三省して可なり。

82

403

